

宗教雜誌

華蓮白大



第 105 号

舍學價創

35 年 2 月

昭和三十三年二月十八日
第三〇五九号
發行
（每月一日發行）
特別承印
第三〇五九号
發行

大白蓮華 第105号

目次

巻頭写真・第8回男子部総会

1月の行事から

巻頭言・確信を持って……………小泉 隆 7

創価学会会長・戸田城聖先生の御遺教録 8

総会講演編⑥

持ち続ける信心を	昭和 29. 6. 20
あやまれる本尊を破折せよ	昭和 29. 6. 27
生命は永遠なり	昭和 29. 7. 18
広布の時近し	昭和 29. 9. 23
広宜流布の時来る	昭和 29. 9. 26
民衆の幸福は広布で	昭和 29. 10. 9
楽しい人生を	昭和 28. 11. 22

唯物思想と宗教……………石田次男 16

末法正意の本尊論⑥……………小平芳平 20

(一) 興師目師へと伝承

4. 日目上人

5. 六老僧の跡

① 五老僧の影響

② 教団の概観

あらゆる邪宗日蓮宗の偽本尊を打ち破る

富士宗学要集の解説⑬……………富木公胤 24

第二巻 宗義部の一

(マ) 五段 荒量

御書講義の研究のために

御書講義の指導から

創価学会の勝利は間違いない……………池田大作 30

御書の対告衆と大聖人の御指導…………… 31

③ 松野六郎左衛門入道殿

御書にお認めのインド・中国・日本の歴史…………… 32

④ アソカ王

邪宗退治物語(その1)

大獅子吼する七百年前…………… 26

一大聖人御在世中の対邪宗問答一

禅寺に入門して……………大賀康弘 34

思想なき文学に思う……………稲葉慶子 35

広布への叫び(読者のページ)…………… 36

今月の行事から・編集後記……………表三

小説・日蓮大聖人……………湊 邦三 40

佐渡流罪の巻⑳

山口将吉郎画

表紙
紙
紙
題
写
真
・
日
蓮
正
宗
第
六
十
四
世
水
谷
日
昇
堂
と
富
士
大
石
寺
大
講
堂
上
人
富
士
大
石
寺
下
山



折伏の大師匠 戸田城聖先生

(昭和 32 年の春に写す)

の足音

— 第 8 回 男 子 部 総 会



↑ 戸田先生の御前に、103本の部隊旗がうちそろい、総会を終了した。
この時すでに、男子部は、前進の年への第一歩をふみ出したのだ。



東洋にひびく前進



立宗708年“前進の年”を迎える



初御開扉を終えて



東洋広布はわれらの手で…九州本部での初勤行



声高らかに、さあ前進だ！



戸田先生、今年もガンバります！青年部幹部の墓参



前進へのたくまじき力、池田総務の御書講義

確 信 を 持 て

泉 小 理 事 長

絶対の幸福をえられる大御本尊様を受持しているわれわれは、常に喜びの生活の連続であるはずである。半信半疑であったり、朝夕の勤行を怠けたり、折伏などは間違ってもしないような人は別として、自行化他に精進して、おのれの幸福を願ひ、広宣流布を志すほどのものは、どんなに苦しい立場につきあつても、ますます勇気をふるい起こして、仏道修行に邁進するのが当然である。

しかし現実はどうであろうか。功德、功德で喜んでいたものが、反対におもしろくないことが続く、自分の折伏した人や、組織内に事故が連続したり、信心不熱心なものが多くなったり、退転者が出たりする。折伏は真剣にやっているんだが、入信するものがない。家庭の事情や、勤務の都合で、座談会その他の会合に出られない等等。

このような場合、御本尊様に対して、疑いが起こるといふようなことはないが、自分自身の信心に、確信を失ない、気力がなくなったり、やけになつたりして、苦しんでいる例が、多くみられる。とくに、幹部、しかも上級幹部ほど、その感を強くするものである。

宗教に対して、無智であつたがために、無関心であつたり、先祖伝来の邪教を、無条件に拝んだり、新興宗教に引きこまれたりしていた、われわれが、仏縁あつて御本尊様にめぐり会い、毒薬である邪宗

教を投げ捨てて、正法を護持することができたことは、最高の悟りであり、大功德である。まして、日夜修行に励むものが、少しばかりのつまずきにおどどすることはあるまい。われわれこそは、末法悪世に立ち上つた、救世志士の一員である。自信をもつて邁進すべきである。

信心についての認識に、浅深のあることは当然である。何もかも心えて、はじめて、一人前の信者になるというような考え方は誤りである。各人が、常に現在の認識と、心境に誇りをもって、活動すべきである。

「聖人の唱へさせ給う題目と我等が唱え申す題目の功德を何程の多少候べきやと云云、更に勝負あるべからず候、その故は愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、愚者の燃せる火も智者の燃せる火もその差別なきなり」(松野殿御返事) 一三八二頁

この御金言を、よくよく味わうべきである。日に見聞を広め、自行化他を行ずる時、われわれの認識は深まり、心境は開けて、止まる時はないのである。

ただ、自分自身というものは、わかっているようであらぬものである。

先輩、同僚の忠言に耳をかたむけることは、われわれの確信をきずつけるものではないことを、忘れてはならない。

戸田城聖先生の御遺教録

総会講演編

⑥

持ち続ける信心を
あやまれる本尊を破折せよ
生命は永遠なり
広布の時近し

昭和二九年六月二〇日
九七六六三〇
九二二三八七

昭二九・九・二六
昭二九・九・二六
昭二九・九・二六
昭二九・九・二六

昭二九・九・二六
昭二九・九・二六
昭二九・九・二六
昭二九・九・二六

持ち続ける信心を

向陽支部第一回總會（講師戸田城聖先生講演で、昭和二九年六月二〇日）
参加支部員一四〇〇名
聖教新聞第一二八号に掲載

金剛宝器戒というものがある。

これは、御本尊さまを一たん受けたものは、所詮、やめられないことになっていきます。退転（たいてん）というのは、進まざることでやめたことではない。それから進まないということである。一たん受けたものは一生進み、来世までも、御本尊さまが、しみこんでぬげようがない。同じ信心をするのなら、功德のある信心をしなさい。なまけてみたり、見ていないからと思わないで、ここまでできたら、あきらめて信

心をしなさい。

それには、わたくしに自信がある。ほかの日蓮宗には、大御本尊様の教えがありません。日蓮正宗のほか、日本にはない。仏立宗、立正交成会とかいってもダメです。あなたの方の中に、まだ信心の新しい方や、あるいは、信心をしてもほんとうにわからない人がいるでしょうが、仏立宗、立正交成会でも、みな自分の所がいいという。しかし、日蓮正宗以外絶対ダメだという証明がある。

それは、広宣流布の時が来る。来た時には、天皇陛下のお使いが来る。その時に、紫宸殿の御本尊様がある。この御本尊様を、どの宗派が持つて行きますか。仏立宗、立正交成会、身延、中山、池上

にありませんか。富士大石寺だけにあります。この御本尊様があるということ一つで、証明できます。これでもって、安心して、日蓮正宗の御本尊様を大切にしてみなさい。

あやまれる本尊を破折せよ

杉並支部第二回總會（聖教新聞掲載で、昭和二九年六月二七日）
参加支部員三〇〇名
聖教新聞第一二九号に掲載

来賓の方より、上げられたり下げられたり、まことにおめでとうございます。今日の盛会を思う時、土台、杉並の発

の石田栄子を左翼として、三人をはじめとして、でき上った支部である。三人とも、わたくしの子が、いの子である。杉並支部長を、よびすてにはできないが、普通よぶ時は、ヤス子とよんでいる。

これは、軽べツの念ではなく、愛弟子として、親しみをこめていつているのである。しかし、いつまでも、杉並にやっておけない。本部として、重要な仕事があり、必要であるから、杉並に支部長が出て、本部へかえしてほしい。支部長も早くクビにしてもらいたくて待っている。わたくしも早くクビにしたい。



支部教学部員の紹介 (杉並支部第二回総会)

さて、なにがために信仰するか。自分が幸福になるために信仰するのである。折伏のためでもなく、また、学会のためでもなく、みんな自分のためである。それなら、戸田はなんのためにやっているのか、と聞かれるならば、わたくしは大きな功德を受けている。わたくしを受けた功德は一パイである。わたくしの

会場一パイとすればみんなのは、これくらいである(小指をだして)わたくしが日蓮正宗創価学会のために働くのは、功德を受けたご恩がえしのためにやっているのです。

仏法というのは、時にかなわざれば、功德がないのである。紙のない時は、身の皮をはいで紙となし筆のない時は、ホネをけずって書いたということがある。今日、紙も筆もある。そういうことをやっても、なんにもならない。だから、時にかなった修行でなくて

はダメです。

いまある宗教は、みなあやまった本尊である。宗教というものは、みな本尊がある。いまは、間違った本尊ばかりです。その間違っている本尊を、命をかけて撲滅するというのが、ホントウに功德があり、仏になれるのです。

しからば、日蓮正宗の本尊が正しい、また、リツパだといっても、手前ミンではないか。立正交成会でも、みな自分の方が正しい、靈友会でも正しいという。自分の方がよいという戸田は、日蓮正宗にこつているから、日蓮正宗がいいというのだろう、という人がいる。御書を読んでみれば、すぐわかるが、かんたんに正宗の正しい証拠を一言いおう。大聖人さまは、広宣流布を、キチットご予言している。そのとおり、かならず

生命は永遠なり

広宣流布する時が来る。その時、天皇が拝む時が来る。天皇が信じる時が、かならずあるから、大聖人さまは不便と思われて、その時のために紫宸殿御本尊様をのこされている。

立正交成会、靈友会、身延、中山等がもし、天皇が信心をするから、大聖人さまおしたための紫宸殿御本尊様を、持つてまいるようにといわれた時に、富士大石寺以外、どこの宗派が持つて行かれるであろうか。これが、日蓮正宗の正統派たる理由である、証拠である。

一闍浮提總与の御本尊様が、ハッキリあるといえる。これをもって、正しい御本尊様は、富士大石寺の御本尊様なりと信じて、あやまった本尊を破折さえすれば、功德があることを、わたくしは、一言申し上げておきます。

講演というから、講義をする調子でなく話したいと思います。

みなさんの中には、まだ入信して、新しい方もいるであります。みなさんは気のドクです。古い人たちは、身じかで話したり、話を聞いたり、教えたりしたことがあるのですが、いまは、なか

なかみなさんと話しあう機会がない。だから、せめてこういう席で、わたくしと二人で、ヒザをつきあわせているつもりで、聞いていただきたい。

われわれの生命は、永遠なのであります。しかしながら、どんな人でも、生命は永遠なんだということを、正確に教え

文京支部第三回総会(豊島公会堂で、昭和二年七月十八日)参加支部員二五〇名(聖教新聞第二三三三号に掲載)

てくれる人は、なからうと思うのです。

キリスト教では、永遠というものは、死んだら魂が天にのぼって、ずっと生きのびているとわかってはいるが、そんなバカな話は、世の中になのである。われわれの生命は、このまま、ずっと続いていくのですから、また、あなた方は、人間に生れてこなければならぬのであります。

すると、あなた方は、迷信だとか、バカなことであるというでしょうが、しかし、ホントウにあることは事実だから、し方がないのです。ホントウにあるということを信じなさい。このことを、いま日本でいっきつているのは、わたくし一人です。

それには、確信があるからいえるのである。世のみなさんは、おそろしくいいきれないのです。なぜかという、徳川時代に、間違った仏教があったので、迷信でもいうことができたのであるが、それが、科学の進歩した今日、科学と同じ、まがなくなつて、いまの宗教家の中に、いいきれぬ勇氣のある人は、一人もいないのである。

しかし、わたくしは、いいきることができません。釈迦が、ハッキリいっているし、大聖人さまも、ハッキリおっしゃっている。そのお言葉を信じ、また、わたくし自身の体験から、たしかに信ずるのです。これは、わたくしが教わったので



支部幹部の紹介（文京支部第三回総会）

人生がこの世きりなら、なんで真の信仰がいりましようか。いくらでも悪いことをして死ねば、それでよいわけだが、ところが、われわれはそれができない。その行為は次の世に持ちこして、その生命が重なることを知って、生命の借金と出てくるからだ。

なぜ、わたしが、この信心をすすめるかという、この次に生れたら、一番小さくとも、このくらい（公会堂）の家に住んで、ピアノも指輪も、なにもかもそろって、おかあさんは美人で、生れてくる赤ん坊は福子で、頭がよくて、丈夫で大きくなってリッパなおヨメさんをもって、また福子をさずかって、なに一つ不自由な暮しがなくという、幸福な生活にさせたいがために、この信心をやかま

広布の時近し

中野支部第三回総会（聖教新聞第一四二二号に掲載）
昭和二年九月三日

同じ話を、今日で三回するが、それは広宣流布ということである。なんで広宣流布をやるのか、いまみなさんと、ここで考えてみたいと思う。みなさんは、毎日安心して生活ができていますか。金がない。商売がうまくゆかない。子供が病気で。亭主が働い

しくいのです。けれど、これだけでは、みなさんはよくわからないでしょう。そこで、ホントウに正しいということは、証拠がなければならぬ。この信心をすれば、かならず幸福になる。来世においては、かならず良くなるという、証拠がなければなりません。

それは、現世安穩後生善処、という幸福境涯を願ひ、生活に証拠をうるのが、われわれの信心なのです。しっかりと信心をして折伏をしたならば、かならず良くなるのです。もしそれがなかったら、大聖人さまに談判して、わたくしのクビをあげます。願いがかなわぬわけがない。現世において証拠をつかんで、ホントウに成仏するように。

ても金を持ってこない等、一家の中でなやみ、まして世の中が不景気になつてくると、商売がうまくいかない。工場では給料をくれなくなる。なやみがふえ、家庭がおもしろくなくなり、その上、病気が多くなつてくる。いまや貧乏が、日本中に流行している。そのために夫婦が



柏原指導部長(現理事)の講演(中野支部第三回総会)

ンカがさかんになってくる。昨夜もやってきたんじゃないか。そういうものをつくするのが信心だ。

貧乏は、アメリカへ行かねばならぬ、というようになりたいたい。金を借してくれといっても、いまみたいに、金がないから借りるといっているのではなくて、一万円札ばかりで、コマカイのがないんだというようになる。そういう世の中は、広宣流布がでなければ、絶対に出現しない。日本から、貧乏、病氣、親子ゲンカ、よめとしいゅうとめのケンカをなくすのが、広宣流布の目的なのです。仏のためにするとか、日蓮正宗をさかんにして、信者をふやすためにやるのではないのです。そして、広宣流布は、日蓮正宗でなければ、絶対にできないのです。信心のない

人にいうと、広宣流布は、立正交成会でも、身延でも、だれがやってもいいじゃないか。同じように、南無妙法蓮華経となえているんだから、日蓮正宗は、その後をつけて行けばいいじゃないか、というかもしれないが、そんなことは絶対にできない。という、そんなバカなことがあるか、それは戸田の独断だという。しかし、証拠はいくらでもある。

日蓮正宗でなければ、広宣流布ができない証拠は、一團浮提の人が信心した暁は、天皇陛下も南無妙法蓮華経となえる。国民全体がやれば、天皇一人拜まないわけにはいかない。その時、天皇陛下が、御本尊がほしい、といい出し、持ってきたなさいといったら、どこの宗派がこれを持って行けるか。

日蓮大聖人は、七百年前に、天皇陛下が信心した暁、宮中の紫宸殿に安置する御本尊として、紫宸殿御本尊と申しあげる御本尊を、おのこしなされている。この紫宸殿御本尊が、大石寺にチャンとある。これをみても、広宣流布は、日蓮正宗でなければできぬということがわかる。過去七百年間、日蓮正宗は、広宣流布できなかったが、わたくしは、いま広宣流布眼前にありという。それは、わたくしたちにはわからないが、大聖人の御遺文を押すればハッキリわかる。

南無妙法蓮華経は、国に三災七難が起った時にひろまるのである。大聖人さま

が、御本尊をおあらわしになった時は、国に七難が起った。その中の最後の他国侵逼難は、九州・志岐・対馬で終ったが、いまの日本はどうであろうか。

大聖人さまの時と比較するのは、もっていないが、同じく三災七難が起り、最後の他国侵逼難では、こんどこそ完全にやられた。宮城前では、外国の軍隊が関兵式をやり、三千年の歴史に大きな汚点をつけてしまった。七難の最後がそれだ。リッパな証拠であり、事実である。

つぎには物価騰貴だ。物が高いのは、日本はじまっていらいであり、ヤミ米が一升二百円から二百五十円もするのだから、深刻な問題である。次に病氣だ。中でも、その大將がハイ病である。

以上、経文や御書に明らかにされているごとく、いまは、正法がまさに滅せんとしていのである。大聖人ご在世当時の、白法隱没の時とよくにている。大石寺の仏法は、世界第一であるが、つい最近までは滅亡にひんしていた。お山は、食うか食われるかのセトギワで、折伏のシャの字もない。ようやく息をしていたにすぎない。

まして、地方の末寺では、ヤネはおちタタミはやぶれ、坊さんは食えずに、百姓や内職をやって、坊さんの仕事はそっちのけである。正宗は、まさに滅せんとしていたのである。

流布の時来るの証拠です。かかる時に、民衆を救わんがために出現したのが、創価学会である。ゆえに、広宣流布近しいのである。近いといっても、歴史上の近さをいうのであって、活動の上ではまだまだで、三類の強敵があらわれなければダメだ。

すなわち、信心をやっていない人間がとやかく悪口をいう俗衆増上慢、邪宗の坊主がさわぐ道門増上慢、世間からあの人にはリッパだと思われている人たちが、有名な政治家、学者等が、国家権力と結託して、学会にたいして迫害をくわえてくる僧聖増上慢だ。

この三類の強敵が起らなくては、広宣流布の時はいらない。大聖人さまの時にはさかんにあらわれてにぎやかだったが、学会には、わずかに一類だけであった。このことについては、わたくしは非常に悲しく思っていたら、第一類に続いて、第二類が最近出てきた。邪宗の坊主がさわぎ出し、三流新聞をとおして誹謗してきた。立正交成会や霊友会は、ちぢみあがって小さくなってしまったが、身延は歴史が古いから、坊主どもがあつまってさわぎ出した。やがて、かならず第三類もあらわれるだろうから、その時、青い顔をしてビクビクするな。

しっかり信心をまっとうして、斗争しきるならば、不求自得といって、もともとなくとも、かならず幸福になる。

広宣流布の時来る

（中央大学講堂で、
参加支議員三二〇〇名
昭和二年九月二十六日）
（聖教新聞第一四一号に掲載）

よくいわれる広宣流布という事について、一言申しあげます。

広宣流布とは、どういふことかということ、よく認識してもらいたい。広宣流布を、あたかも、本山のため、または大聖人さまのためにやるように考えるのは間違ひです。

広宣流布は、仏さまの本意であるが、われわれがこれをするのは、これは、一國の民衆を救ひ、各自の現世安穩ということをあらわすためにやるのです。

大聖人さまのご出現の根本は、南無妙法蓮華經という法門によって、日本中、いな東洋中、いな世界中の人人を幸せにするためです。

日本の國が広宣流布するならば、日本國には災難がなく、各自は、みな安樂に暮してゆけるようになる。そこで、広宣流布を、われわれに命令になったのです。

いままでも、たびたびこのことはいわれてきましたが、時が来なかつたのです。このたびこそ、広宣流布の時が来たのです。なにをもつて、それを断ずるかといふと、いろいろありますが、一つは、日

本の國がほろびたと同様の結果になったことです。

他國侵逼の難、大聖人さまの時に、蒙古の襲来がありました。幸にも、大聖人さまが、げんぜんとしておられたために、わずかに、九州の一部と、岩崎、対馬が侵されただけで終つた。

こんどは、日本の國に、他國侵逼の大難が、げんぜんとあらわれたのです。しかも三千年の歴史に、汚点をつけてしまいました。悲しいかな、宮城前において外國の軍隊の閱兵式を目のあたりに見なければならぬのです。日本人として、この上ない恥です。これは、だれの罪でもなく、日本全民衆の罪です。われわれは、なんのくせもあつて、祖先に顔をあわせることができるでありましょうか。

この國の終りになる時こそ、広宣流布の時であります。

二つは、三災七難がすでにあらわれている。

三災といふのは、他國侵逼の難、物価の騰貴、病氣の多いといふことです。物価の騰貴とは、物の高い時において、われわれの生活の収入と支出の度合がと

れないことで、いつもいふように、明治陛下の時代は、五十錢玉一つあれば、電車で往復し、使いができて、ウドンが五錢、カレーライスが十錢、安いところで七錢、ウイスキーがコップ一パイ十錢で月給は大たい二十五円から五十円で、らくらく食べてゆけた。

その時も、貧乏人はいたが、どこの家でも、大てい勤めている人は、二十円や三十円の貯金を持っていた。いまの金にすると、まあ十万円ぐらいでしょうね。いまの世の中で、十万円の貯金がある人は、少なくはないでしょうが、反対に、十万円の借金を持っている人の方が、多いのではないのでしょうか。

このように、いまでは、貧乏人が多いのです。しかし、これは好んであなた方がやったのではなく、世の中の情勢が、われわれをそうさせてしまつたのです。

次に、病氣のことですが、ハイ病といふ病氣は、むかしからあつた。ところがこのごろ、医者が、一生けんめい病氣を製造している。切らなくてもよいものを切り、殺さなくてもよいものを殺したりしている。次に、小兒マヒ、その他の病が、非常に多い。お山に行つて、こちらから病氣の相談を受けるとなると、おそらく四・五百人は来ると思う。このように、病氣が多いから、医者が繁昌している。このように、いま三災は、全部あらわれています。

法の上からみると、大聖人さまがご出現の時は、天台法華は、ほとんどほろびていた。いま、創価学会が活躍する時はもつたになくも、富士大石寺は、まさに破滅にひんしている。ご本山を守り、自身の寺をあがめようといふ信者はなく、口でもない信者はかりになつた。ひどい寺では、信者が六、七軒しかないところもあつた。ご僧侶も生きていますから、米らしいものを食わなければならぬ。ヤネはおち、タタミはやぶれ、本堂は見るに見かねた有様になり、まさに正法は滅せんとしているのです。いまでも、地方に行くと、これが日蓮正宗の寺かと思ふような、なまげない寺がたくさんあります。

世界に誇る大仏法の衰微の姿は、悲しむべき状態です。法華經にあるように、法滅の時にあつてこそ、広宣流布の機会なのです。

いいたいことは、たくさんあるが、ほんとうに日本民衆を救済し、一國を幸福にするのはいまです。この物価の高い時に病人もなく、一家が平和になり、また、一國が平和になるのが広宣流布なのです。いま日本をみれば、一國の首相が外國へ行くのに、どういふ目的で行くのか。また行くのが悪いのかは、わたくしは知らぬが、日本の政府の代表として、一國の首相が外國へ行くといふのに、國會がその総理大臣を訴えてみたり、決算委

員会では、まるで総理大臣に、汚点をつけようとしている。外国から帰ってからもよいではないか。わたくしは、吉田首相のカタを持つわけではない。あのおじいさんに、なにももらいませんが、内部の恥を外国にさらさせるやり方は、少なくとも国会議員として、とるべき態度ではないと思う。このような政治で、われわれは、物価騰貴からまぬがれることができるでしょうか。

ところで、つけくわえておきますが、身延でも、立正交成会でも、霊友会でも田中智学等も、さかんに広宣流布をやるとい



講演中の会長戸田城聖先生
(築地支部第三回総会)

っている。それがホントウかわからない。そこで、かりに、立正交成会で、あるいは、身延で広宣流布をやったらどうなるか。いつもいうように、天皇陛下が、妙法を信ずる時のことを、大聖人さまがご在世の時、チャンと予言なさっています。『天皇陛下はかならず信仰する。その時の御本尊をしたためておく。これを紫宸殿にかざれ』といわれて、のこされているのが、紫宸殿御本尊と申しあげます。

この歴史を、天皇は知りませんが、も

という、身延にも、立正交成会にもない。ただ、富士の大石寺のご宝蔵に、げんぜんとしてあります。このように、このことでも、日蓮正宗が日蓮宗の正統で

◎ 民衆の幸福は広布で

仙台支店第八回総会(仙台市レジャード・センターで、昭和二十九年一月九日)参加支店員六〇〇名、聖教新聞第一四七号に掲載

あり、もつとも大利益あるということがハッキリするのです。みなさんも、しっかり信心して功德をうけるよう、強い信心を続けなさい。

さきほどから、広宣流布ということについて、いろいろと話されましたが、広宣流布ということは、大聖人さまが、この世にお出ましになった本願でございます。しかして、われわれにたいしての命令であります。

それは、広宣流布するならば、この世の中が平和になる。世の中から貧乏というもの、病氣というものを放て、きける。民衆の幸福のために、大御本尊さまを広宣流布せよと、ご命令になったのであります。

しからば、こういうことが一おう考えられる。日蓮宗というものが、数たくさんあるんだから、どの宗旨が広宣流布してもよいじゃないかと、一おうは考えられる。だがそれは、ほかの宗旨にたいしてご命令はないのです。わが日蓮正宗のみに、広宣流布のご命令があるのです。こういうならば、戸田は、自分が日蓮正宗だから、日蓮正宗をひいきしてそ

うのだろうと、みなさんはお考えになるかも知れません。

しかし、あらゆる哲学的、あるいは歴史的に、あるいは実証的に説明はできませんが、ごくやさしく、そして、わかりよく申しあげれば、かりに、いま一番妙なのでは、立正交成会、あるいは妙智会、あるいは霊友会、かりに身延としてもよろしいございませう、それが広宣流布したといたします。

その時に、大聖人さまのご遺言があります。それは、かならず広宣流布する。その時に、天皇陛下が御本尊をいただきたいというに違いない。勅使を、かならず御本尊様のところに出すであらう。その時に、御本尊様がなかつたならばこまるであらうから子がしたためておく。そして、もし勅使がおみえになったならばこの御本尊様は、国家鎮護の御本尊様であるから、紫宸殿へかざるべし、これを紫宸殿御本尊と申しあげております。仏さ

キメアタヒ

までですから、もう広宣流布のできることをチャンとご承知で用意がある。

身延が広宣流布したとして、お前のところに、紫宸殿御本尊があるであろうから、持ってまいれと、陛下からいわれたとして、身延は持って行けない。ましてや、このごろのかけだし、の立正交成会や靈友会にあるわけがない。どこにその紫宸殿御本尊があられるか。富士大石寺のご宝蔵に、げんぜんとしてあるのであります。

これをもって、仏勅は、日蓮正宗、日蓮正宗のみが、ホントウに大聖人さまの教えを清く守って、かならず広宣流布するまで進めよ、とのご仏勅なのであります。

しからば、七百年この方、広宣流布、広宣流布と呼ばれながら、いまだかつて一べんもその姿をみない。いま日蓮正宗は広宣流布を叫びながら、またしてもできないだろうといわれるかも知れません。

しかし、いろいろな点で、証拠がありますが、できるという証拠です。これとかいつまんで申しますならば、いまやわが国に、三災七難が起っております。この三災七難は、広宣流布する時の前兆なのであります。七つの難と申しますのは、風の難、火の難、水の難、星の難、うちわめ、敵国から攻められる、これがさかんに起るのであります。

風の難はこないだあったばかり、火の難は戦争中にさかんに日本中にあった。水の難は、しょつ中だ。

吉田が外遊する。こんなこといっても吉田から一銭ももらっていないから。一

国の首相が、外国に行くんだから、良かれ悪しかれ、うちわめあれほどケンカをして、行かなければならんというのではないでしょう。また、敵国から攻められたという事は、三千年來のおが国の歴史を汚し、宮城の前で、外国の兵隊の阅兵式を見るなどということは、日本人として腹が立ってしようのないことじゃないでしょうか。

この七つの難はもうあらわれている。これからも、チヨコチヨコ出てくる、小さいのや大きいのが。それから、三災といふのは、物価の騰貴、それから、国が外国から攻られること、次は疫病がはやる。三つともはやつていましょう。疫病は、まだはやつていないじゃないか、というようなノンキなことをいつてはいけませんよ。

疫病に二色ある。ホントウの疫病と、それから、みんなの頭が狂つちやうて、正しい見解を持つことができないのも疫病のうちにはいる。精神病だ。ハイ病が多い。医者が、一生けんめいハイ病をこしらえるのを手伝っている。うちやうておいてもなおるようなものも、ハイ病潤だから、あんた三月も休めといわれ、とたんにフニヤンとなる。そして、生命力がおとろえるから、どんどん進行する。

ロッコツをとった。あるいは、ハイはよくなったかしのれないが、身体の均衡がとれなくなつて、生命全体をたもつことができなくなる。もう日本人は、ハイ病が大へん多いですよ。そのほかの病氣もずい分ある。そういうような三災があら

われている。しかも、ここに申しあげますのは、もつたいないその大御本尊様を、護持してきたくところの日蓮正宗がまさにつぶれかかっている。これが証拠の一つなんです。

いままで農地があつて、あまりさわがんで、生活のできた本山も、農地法によつて米がとれなくなり、もう実に貧乏で、折伏の意欲などあつたもんじやない。信徒にこびる、こと、あとお考え願いたい。そのほかも、同じように、ヤネはこわれ、ユカはゆがんでいような寺は多分出てきた。旧信者は、折伏なんかとうに忘れてしまった。お坊さんもそれというては信者がいなくなるのをおそれていわないようになり、大法まことに滅せんとする時があらわれたのであります。

こんどは、広宣流布という大偉業があらわれる前兆なんです。そこでわたくしは、これが近きなあり、と確信するものであります。だが、まだ二年や三年でできることじやない、これが、いよいよ出てくる時、もう大丈夫来たぞ、というには、これは予言を申しあげておきます。

三類の強敵というものがあらわれて、

その三類の強敵に向つて、われわれが、かんぜんと斗ひうる時なんです。

三類の強敵と申しますのは、俗衆増上慢と申しまして、一般大衆がさかんに悪口をいう。次に、道門増上慢と申しまして、お坊さん方が、正しい正宗のお坊さんじやありませんよ。他宗のお坊さんがさかんに悪口をいうことだ。その次は僧聖増上慢と申しまして、世の中からエライ人だと思われている人が、アダをなすことです。それでしかも、仏勅をかしこんで広宣流布の途上に出た学会は俗衆増上慢にしか、まだあつておりません。

心にさびしく思つておりましたところが、いよいよ学会も、十五万世帯を数えるにいたりましたら、お坊さん方が、お坊さんというのもモツタイナイのですが、ね、邪宗の坊主が、急にメシが食えなくなるので、こんどは、躍起になつて、三流の新聞記者を買収して、そうして、さんざん悪口をいい出してきた。二類が出たのだから、まことにメダタイ。こんどは三類があらわれてくる番になつてくる。

しかし、二類が、まだまだふえなければならぬ。この二類がふえてくる途上に、退転させられるのですから、用心しなければなりません。わたくしは喜んでおつても、あなた方が退転してはダメです。だから、念をおしておきます。

まだ出ない第三、一番上等品、それがあらわれてきた時には、大ていコシをぬ

楽しい人生を

かす。その時こそ、コシをぬかさんように、二類ぐらいでオドロイテいるんじや三類の方は、なおこわいんだからね。それにオドロかんようにして、そして、われわれは、広宣流布をまっとうし、靈鷲

山会に大イバリで、創価学会員です、広宣流布してまいりましたと、大聖人さまにお目どおりできるように、信心して行くではありませんか。

御価学会第九回總會(中央大学講堂で、
午後九時) 参加会員七五〇名
昭和二十八年二月二日 聖教新聞第九八号に掲載

カゼをひいておりますので、聞きずらいかと思ひますが、おわび申しあげておきます。

八ツの子供が、これはいつもする話なんですがね、どうも初代会長にだんだんてきたといわれまして、同じ話でさなくなっちゃった。八ツの子供が、十貫の荷物をしよって、八里の山道を歩かなければならないとしたならば、どんなにか、その子供は悲しいことではないでしようか。ところが、東富士とうふじのような相撲取りが、十貫目の荷物をかついで、いまごろの山道を越すとすれば、秋の景色を楽しんで、ゆうゆうと、ほがらかに、山を越すだろうと思ひます。

そこで、われわれが、この世の中をみますれば、商売がうまくゆかぬという荷物を背中にしよって、あるいは、ハイ病というような荷物、あるいは、心臓病というような荷物をしよって、ヨタヨタ歩

いている人と、そうでない、ゆうゆうとこの人生を歩いている人とがあります。どっちの方が多いかというと、ヨタヨタの人が多いです。それがために世の中は、苦勞するところであり、苦勞があたりまえないだと思ひこんでおります。しかるに、われわれは、なんのために生れてきたかというのに、衆生所遊樂しゆじやうしようれき、この世の中へ、遊びに生れてきたのであります。楽しみに生れてきたのであります。

それを、楽しまないで、泣いたり、悔いたり、おこったり、そうして人生をおくっている。かわいそうなことではありませんか。

ホントウの信心して、近ずいた幸福の焦点しゆんてんというものは、どんな姿でなければならぬでしょうか。それは、生きていくことそれ自身が楽しいんでなきやいけない。今晚、映画へ行くから楽しいとかあるいは、今晚は一パイ飲めるから楽し

いとか、大阪へ行って金をとってくるからうれいとかいう、相対的な幸福は、低いもので、絶対的な幸福、借金取りが来てもうれしくってたまらないような生活なんだよ。(録音不良) 生命力あふれる。女房と話していれば、女房と話していることが楽しい、商売をしていければ楽しい、顔洗えば楽しい、ご飯食べれば楽しい、オナラされてもユカイになる。こういう人生こそ、信心しきつた時に出てくるものらしい。そうならなくちやいけない。それを、苦惱の方ばかり味わって、(録音不良) 涙で死んだって、なにになるんだい。この世に生れてきたかいないぞ。食うものもろくすっぽ、食えないで、飲めるものも飲めないで、着るものも着れないで、それで、しょうばい顔して死んでしまふ。(録音不良)

しかれば、世の中をホントウに幸福に、生きていくこと自体を楽しんでいけるというものは、どうすればよいでしょうか。金がなくてね、貧乏ばかりしていてね、この世が楽しいというのはウソつきだぞ。病気をしよって、そうして、体を弱らしよって、ウンウンうなってまことに楽しいと思うか。使うだけの金があつて、楽しむことのできる体力をもつて、そうして、この人生をゆうゆうとやうっていくためには、旺盛な生命力があるんだ。旺盛わうせいなる生命力があるんです。そ

の旺盛わうせいな生命力(録音不良) あるいは、ふんばつてみたつて出てくるもんじやないんだ。この旺盛な生命力、幸福をつかめるところの旺盛な生命力は、日蓮大聖人さまの一闡浮提總持いつくわんぶだいそうぢの御本尊様を拜まなければ、絶対外ぜったいがいにありえようがないです。

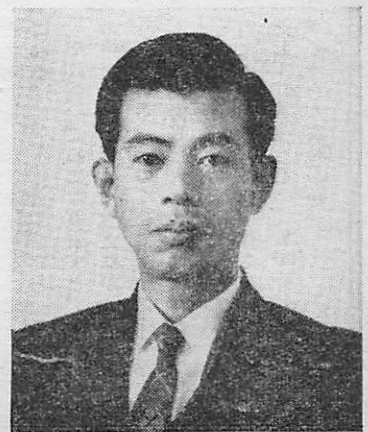
そういう、もし、これが、しみじみとわかつたらですね、わたくしが、御本尊様というの、もつたないことですが、リップパな機械ですよ。幸福を生み出してくれる機械です。それを、ただみたくにもらつて、ご本山にも、お寺にも、ご奉公する時は、なんだ金ださなきやなんなのか、インチキだなんて。もし、まあ、悪いたとえ話ですけども、日蓮大聖人がお出ましになつて、それで、リップパな御本尊さまをお書きになつた。

この御本尊さまは、みなさんが絶対に幸福になる機械です。ただし、朝は五座、晩は三座、折伏は年に二十人ぐらいしなければダメだ。やればかならず幸福になる。

それを今ごろになりますと、あなたの方の中でも、なぜ早く教えなかつたかという人もある。そのくせに、最初やる時はみんな反対した人ばかりだよ、これは。まあ、そういうわけで、御本尊様のお力により、金もでき、体も丈夫になり、そして、人生を心ゆくまで楽しんで死のうじゃありませんか。

唯物思想と宗教

聖教新聞主幹 石田次男



「唯物思想と宗教」……新春早々私に与えられた課題がこれである。論題としては非常に大きなものであり、広般多岐にわたらなければならぬであろう。唯物思想の側からみた宗教、宗教者の側からみた唯物思想、これだけでも論争は、はてしないものがあるはずだ。さらに、唯物思想の種々の相、歴史的な発展課程、宗教も多数でひと通りではない、さらに観念論や唯心論側からの唯物論批判……。こうみてくると、限られた紙面で扱いきれるものではない。そこで、思いきり大ナタをふるって、結論を先に出し、現在の唯物思想を、仏法との対比の上においてながめてみたい。

親心本尊抄の五重三段の第五段に、宗祖大聖人がおせられるには、

「又本門において序正流通有り、過去大通仏の法華経より乃至現在の華嚴経乃至至門十四品涅槃経等の一代五十余年の諸経、十方三世諸仏の微塵の経経は皆寿命の序分な

り、一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名づく」と。

しからば、現在の唯物思想も、大きくは妙法の序分であろう。妙法いわく「仏教の流化実ここによる、礼楽前に馳せて真道後に啓く」と。

また、大聖人のおおせには「法華は大綱兩前は綱目」と。また「天台云く、『金光

明経に云く一切世間所有の善論皆この経に因る、若し深く世法を識ればすなわちこれ仏法なり」と。

しからば唯物思想も、ひとたび仏者の手に握られた時には、本来の性をかえて、一転して、妙法の綱目の役をはたすものとなるかもしれない。そして、法華流通の、なにがしかの役目を分担するかもしれない。

唯物論と弁証法 → 弁証法的唯物論

現在ある唯物思想は「弁証法的唯物論」である。すなわち、マルクスとエンゲルスの手になって、レーニン、スターリンおよび毛沢東にうけつがれ、いま世界各地のマルキストによって、その理想を実践に移そうと、激しい運動がつづけられている。この弁証法的唯物論以外の唯物思想は、いまでは、まったく問題にならない。この弁証

法的唯物論は、哲学としての唯物論と、論理学、認識論としての弁証法との、発展的一体化によって成立したといってもよいであらう。

① 唯物論の立場

唯物論は原始時代からあった。そして、紀元前六、七世紀ごろから、その学理化が

試みられ、い、二十世紀の今日まで、絶えず観念論、唯心論と闘いつつ、その学理を発展させてきた。

唯物論とは、一般的には、物と心、または存在と思考との関係において、物または存在を、心または思考よりも先にあり、重要であるとす立場である。すなわち、精神的、観念的なもの（精神活動やその所産、たとえば、イデア、神、絶対精神など）を第一次的、根源的なものとしてこれを重視するところのイデアリズム（観念論または唯心論）とは反対に、まず、何らかの物質的なものの客観的存在を承認し、これを第一次的根源的なものとして重視するところの哲学上の立場、あるいはそうした思想傾向、ないし生活態度を意味する。この立場では、あらゆる存在は、ある根本的な物質に還元され、あらゆるできごとは、その根本物質のある運動過程として理解される。靈魂とか神とかいうものも、物体（肉体）

のある作用として理解される。そして、このような神的存在は、空想の所産として否定される。その点で唯物論は無神論とつながる。

② ヘーゲルの弁証法

弁証法の歴史も、唯物論と同じく随分古い、紀元前五世紀のゼノンあたりがはじめであろうか。しかし、途中はみな省略してさしつかえないであろう。そしてヘーゲルにいたる。このヘーゲルまで、弁証法は主として、観念論の側のものであった。

形式論理学が矛盾律を基礎としているのに対して、弁証法は矛盾の論理学である。形式論理学は、矛盾は存在しない、あるいは矛盾を含む認識は真理ではない、と考えるのに対して、弁証法は、矛盾は存在するとして存在も認識も矛盾を含むが故に発展すると考える。ヘーゲルは「すべてのものはそれ自身において矛盾するものである」といい、また「矛盾はあらゆる運動および生命性の根である。あるものは、ただそのうちに矛盾を蔵する限りにおいてのみ衝動と活動とをもっている」といっている。

弁証法は、ヘーゲルにおいてその哲学の基本的な方法にまで高められた。ここでは無限な実在と有限な人間精神との区別はとり去られ、全実在の創造者としての絶対理念そのものが、内的矛盾を含む発展過程としてとらえられる。つまり、理念は自己自身を区別してその否定態である自然に転化し、自然は精神において自己の真の姿を見

る、自然は精神とその根底において同一であり、精神の外化、その自己疎外である、とするのである。

③ 弁証法と唯物論の結合

弁証法的唯物論は唯物論的世界観である。これが弁証法的唯物論とよばれるのはその世界観が唯物論であるとともに、世界に対する見方、認識の仕方が弁証法的であることによる。以下に、その重要点を列記してみよう。

(1) マルクス、エンゲルスはヘーゲルの弁証法をうけついで。しかし、ヘーゲルは観念論者であったから、マルクスとエンゲルスは、ヘーゲルの宗教的諸観念を批判して、形而上学的、政治的、法律的、道徳的な諸観念を宗教観念として説明した。

マルクスとエンゲルスは、宗教の批判が社会の批判を含む、一切の批判の前提であることを認める一方、哲学的理論をもってプロレタリアート解放への精神的武器としてようとした。

「われわれの出発点とする諸前提は、決して勝手な独断でなく、想像によつてのみ捏象される、現実的な前提である。それは、現実的な諸個人、行動、その物質的な生活条件である。一切の歴史記述は、これらの

自然的基礎と、歴史の進行途上で人間の実践が、これらの自然的基礎を変更するという事実から出発せねばならない。人間の表象、思考、精神的交通は、かれら（人間）の物質的行動の直接の流出としてあらわれ

る。意識が生活を規定するのではなくて、かえって生活が意識を規定する」(ドイッイデオロギー)

このように、かれらは宗教的偏見をはらって現実を直視し、直視した現実を变革しようとする立場をとった。

(2) ヘーゲルの場合、世界の本質である理念、精神が究極において絶対者「神」にまで至つて終るのに対して、マルクス、エンゲルスはこれを逆立ちであるとし、この逆立ちした弁証法を、転例させて、世界の弁証法的発展の主体を「理念ではなく物質である」とすることによつて、「弁証法的運動の一般の形態を、はじめて包括的かつ意識的な仕方で叙述したヘーゲル」(マルクス)の精神を真にうけつぎ、さらに発展させることができたと称している。

このようにして、弁証法は唯物弁証法としてマルクス、エンゲルスの革命的立脚地、方法となった。レーニンによれば弁証法は「もっとも深遠な発展学説」であり、究極的なもの、絶対的なもの、神聖なものをみとめない。弁証法的見地からすれば、いっさいのものは生成と消滅との過程のなかにある。

(3) 唯物論においては、思考よりも根源的な存在は物質である。物質は精神の産物ではなく、逆に、精神そのものが物質の最高の産物である。エンゲルスは「世界の現実的統一はその物質性にある。そしてこの物質性は、……哲学と自然科学との、長い遅々とした発展によつて証明される」と

主張する。すなわち、唯物論によれば、世界はその本性において物質的であり、世界におけるさまざまな現象は、運動する物質のさまざまな形態である。

(4) 観念論では、意識を物質から切り離されたものとみるのに対し、唯物論では、意識を物質から切り離さない。そして、レーニンによれば「意識とは高度に組織された物質の属性」あるいは「物質の最高形態に結びついた特性」であるとする。意識や精神の名のもとに、いきなり高度に抽象的な観念や思考をおもひうかべるのに先立って、まず、最低の段階として感覚から出発する。そして、人間の肉体と結びついた直接的な感覚から、抽象的な概念や判断や推理に到達するとみる。

その後、十九世紀いろいろの生物進化論、現代のオパールの生命起源論、パブロフの条件反射論など、いわゆる三大発見といわれるものは、この物質の発展過程を科学的に証明したものだといふ。

④ 「物質」の意味について

ここまでくれば、まだまだある主要点の列記を一応打ちきつて弁証法的唯物論の根本になる物質にふれなければならない。この学説でいう物質とはいかなるものか。また、人間および生命とはいかなるものか。

(1) 物質は、そのながい自己発展の過程の結果として「生命」を、そして、ついに人間という有機体と、その属性としての意識を生み出した。したがって、物質その

ものは、そのひとつの所産としての意識からは独立に、すなわち客観的に存在する。生命現象は複雑な条件のもとに現われる、物質の物理的・化学的現象である。

(2) 科学の発展とともに、物質概念の内容は、いろいろにかわるけれども、客観的存在という物質の、この哲学的意義はかわらない。物質というカテゴリーで指示される、対象領域がずれることはない。

(3) 唯物論の根本前提は、外界の承認われわれの意識の外の、かつ、意識から独立している物の存在の承認にほかならない。

レーニンはいう「物質は客観的実在をあらわすための哲学的カテゴリーである」
「物質の概念は認識論的には一人間の意識から独立に存在する—客観的実在以外のものを意味しない」

(4) 物質の性質構造については、機械的唯物論では、物質を不変で一定の性質をもった部分からなるとした。しかもその運動は物質の自己運動ではなく、運動の原因を外部にもつ、として行きすまった。これに対して、弁証法的唯物論にとっては、運動は物質の不可分の性質である。

また、その物質の運動は、力学運動のような、特定の形式だけで理解されてはならない。熱・光・電磁・化学現象、さらに感覚や思考現象も、物質の運動の種々の形式であり、現象形態であって、これらの現象は相互に結びつき、互に転換されるものである。生命現象も、複雑な条件のもとに現われる物理化学現象である。

(5) このような物質の性質ならびに構造に関する理論を、弁証法的唯物論は特殊科学に負うている。特殊科学は、部分的・一面の知識である点で、世界の一般的・統一の理論である弁証法的唯物論と異なっているだけである。

これによってわかるように、弁証法的唯物論は、諸科学が面目を一新するたびに、

弁証法的唯物論の実践についての理論

① 人間社会の物質的土台

いままで、唯物論、弁証法、弁証法的唯物論およびそこで把握された「物質」そのもの、生命観などをみてきたが、その他に絶対に無視軽視してはならないことがある。

それは、弁証法的唯物論の主要な課題はこの「物質的なもの」を人間社会において具体的につきとめたことである。そこから独自の社会観が生まれ、史観が生まれ、それらをもとに資本論が生まれて、弁証法的唯物論という哲学、理論が、実践面への指針を与えているのである。そして、その具体的な運動が共産主義運動、マルキシストの社会主義運動として、世界各地で活発化しているのである。以下、それについて弁証法的唯物論の説くところをあげてみたい。

(1) 人間社会における物質的利害、物質的關係、物質的生活といわれるものは何であるうか。人間は自然の規定をもつと

新しくなるといふ面をもつ。しかし、そのために、物質概念そのものを、あいまいにしたり、不必要にしたりすることはない。ゆえに、どのように発展しても結論は、物質とは「客観的実在(註)意識から独立に存在するということ)をあらわすための哲学的カテゴリー」以外のなものでもないのである。

もに、社会的規定をもち、人間生活においては、この社会的規定こそ主要なものであり人間はいわば「社会的に組織された物質」である。マルクスはこの社会的であるとにも物質的な規定を、社会における人間の物質的生産に見出した。社会のなかで人間は、無数の糸によって互に結びつけられている。その社会における様々な関係の根源として、物質的な生産関係をめぐり出し、これを「社会の経済的構造」と名づけた。

(2) 社会にはそのほか、観念的・精神的な関係もあるが、それは、人間の意識活動をまたねばならない。哲学の体系、道徳的理想、宗教の観念、芸術作品など一般にイデオロギーとよばれるものは、すべて人間の意識過程に依存しているが、これに反して、社会の物質的な土台としての生産関係(たとえばドレイとドレイ所有者との関係、労働者と資本家との関係)は、決して人間の意識的な計画や設計によって成立し

た関係ではなかった。そして、これら生産関係の歴史的な交替を支配する法則は、物質的な性格をそなえていて、人間の主観的欲望や意識によって、それをくつがえすことはできない。このように、人間は常に意識をもつにも関わらず、社会の生産関係そのものの物質的性格は、少しもそのためにそこなわれない。

(3) 以上のように、弁証法的唯物論は意識に対する物質の根源性を主張する。そして、この「物質的なもの」を人間社会における「物質的なもの」にまでつきとめてこれを人間の物質的生産関係としてとり出し、さらに、この物質的なものを矛盾にみちた弁証法的関係としてとらえる。

(4) 以上から、次の歴史観が引き出される。すなわち、人間社会は、政治・法律的諸制度ならびに思想文化を含むひとつの全体である。そのなかから人間生活の基本的条件として「物質的な生産関係」をとり出す。そして、この物質的な生産関係「歴史を動かす力」を見出し、その弁証法的な運動法則を明らかにし、そして、全体としての「社会の必然的運動法則」についての科学的認識を可能にした。この認識と社会の運動の取り扱いは、もちろん弁証法による。

② 資本論の概要

資本の運動法則の解明

資本主義社会は、資本の支配する社会である。資本は利潤追求のために、この社会のすべての物的・人的資源を利用する。し

たがって、その社会の発展につれて、物も人もすべて資本に従属し、資本の支配に服する。これは社会的自然法則ともいわれる。

〔第一巻〕 資本はどうして利潤を生むか。

資本の蓄積は、労働者階級にどんな影響を及ぼすか。それは、利潤は資本が労働者を搾取してえた剰余価値である。この剰余価値の搾取を強化するためには、資本は、ますます大工業と機械生産に頼らなければならぬ。その結果として、労働者は機械の一部となるばかりでなく、その機械によって駆逐され、失業と貧困にさらされる。

〔第二巻〕 貨幣資本→生産資本→商品資本

社会全体としては、このような資本の転形が、いつでも円滑に行なわれるとは限らない。その場合には、過剰生産や恐慌が起きる。その過剰生産や恐慌の基本的条件を説明する。

〔第三巻〕 生産過程で生産された剰余価値が、流通過程をへて、どうして、利潤や地代や利子などに分化して、社会の各階級に配分されてゆくか、その道程を説明する。

それは、競争の結果、社会全体としては一つの平均利潤が成立する。しかも、競争は平均利潤を次第に低下させる傾向をもつ。これに打ち勝つためには資本家は、一方では、資本の蓄積によって、大工業と機械生産を拡大するとともに、他方では労働者の搾取を強化しなければならぬ。

こうして、剰余価値の獲得と分配をめざして争う資本家階級と、剰余価値の搾取をこりむって、ますます窮乏化する無産階級

の二大陣営に分裂する。

社会階級の必然的移行

一方の側の富と資本の蓄積は、他の側の貧困と窮乏の蓄積である（資本の運動がもたらした必然的結果）これが資本主義社会の矛盾であり、これを解決する者は労働者階級である。すなわち生産の社会的性格と生産手段の私的所有との矛盾は、生産手段が社会全体の所有になる社会主義社会に、必然的に発展していかなければならない。

結論

以上をもつて高度に発展し、かつ現在用いられている唯物思想である「弁証法的唯物論」の概観を終えるが、私があえて本論の大半をついやして弁証法的唯物論の内容を紹介したのは、世間はもちろん、学会の若い人たちでも案外、弁証法的唯物論の内容を正確につかんでいないのではないかと余計な心配をしたからである。マルキシズムで言うところの、物質、唯物論、弁証法この三つに対する正確な内容の理解なくしては批判も破折も成りたない。少くともその批判と破折とを第三者になつとくさせることはできない。また弁証法的唯物論に対する内容理解のためには、これ以上大部の概観も必要としないであろう。あえて学校のテキストみたいなのを作ったゆえんである。これはごく限られた短時間でまとめたものであるので、そろうがあるかもしれない。もし不明確または誤りを発見した場合にはすみやかに教えていただきたい。

私は本論のなかで急いで精密な批判を下すことをさけた。なぜならば限られた時間と紙面では無理だからである。唯物思想と仏法、この題のもとにありきたりの論文をつくることならばできたかもしれない。しかしそれでは読んで下さる方々に、どれ程の利益を提供できるか、筆をとる者のわがままかも知れないが、そう考えるのである。

現代の若い学徒を魅惑しているマルキシズム、二大陣営の一方の思想上の牙城であるマルキシズム。私はこの原稿を作るについで、自分は自分なりに、目を改ためて、気がすむまで論じてみたいと思っている。そして、将来学会の中心として働かざるべき青年部の人たちにも、是非この批判、破折について充分考え、論じていただきたいと思うものである。どこが否で、どこが是か、観念哲学との優劣は。広宣流布の途上全く邪魔なものか。手段方法論として生かして使わすべき点があるのかないのか。興味深々たるものがあるではないか。

はじめに、唯物論に対して法華の序分的性格ありとした。それは、仏法と全く縁のない国々の民衆に対しては、その一面があるであろう。また法華流通の網目的性格も、あるいはもっているかもしれない。それは、化儀の広布の手段方法について、現代を理解し、世界の進んでいる方向を理解するためには、また、物質文明の開拓の仕方については、役立つ面があるかもしれない。

しれないと思ふからである。

何よりも大切なことは、仏法と対比して破折すべき面を破折することである。所詮は内外相對の一部である。弁証法に徹するならば、弁証法自体にも矛盾ありと言えないだろうか。唯物論では、最高理念や神に対して、客観的物質の存在の優位を主張し、そして神を否定する。観念に対する物質の優位を主張する。しかし、唯物論でとらえた「神」なるものは、仏法から見れば存在しないものである。体よりいでた用である。用たる神を否定しても仏法は何の驚異も感じない。

そのほかマルキシズムは、人生の目的、これから容易に推察される社会本来の目的を忘れている（こういえばおそらくそれはイデオロギーの問題で、本質的な問題ではない）というであろう。だがそれでいいの（か）人間の自由は、第二義、第三義として扱われ、機械的に扱われていないか。生命と物質とはどちらが先か。生命は複雑な物質運動のあらわれというが、はたしてそれが真相か。

矛盾を強調するが、合理もまた同時に存在する。絶対矛盾、絶対合理というものがある。断定できるか。合理も矛盾も、所詮は人智の觀念の所産とはいえないか。法爾自然、如如の法界は弁証法でとらえられるか。そのほか、おもしろい課題が山積している。読者の方々に、それらをいろいろと思案していただきたいと考えるものである。

末法正意の本尊論 (6)

教 学 部 長

小 平 芳 平

二 興師目師へ

と伝承

4 日目上人

宗祖日蓮大聖人から日興上人に対する御付属が、宗祖御在世当時から、すでに必然的だったのと同様に、日興上人から日目上人に対する御付属も、もとより必然的に決定されていたことと拝せられます。

宗祖の御入滅から鎌倉時代の終りまでの五十余年の歴史は、ほとんど日興上人の御事蹟が中心となっておりますが、同時に日目上人がともに御活躍なされていきました。日目上人は文応元年に伊豆国仁田郡畠郷にお生まれになった。御父は新田五郎重綱で、新田家は御堂関白藤原道長の末えいにあたり、陸前国登米郡上新田が本領でした。また御母は伊豆の南条七郎殿の娘で、時光殿の姉に当る方でした。

十三歳の時から、伊豆の走湯山に上り修学されていましたが、文永十一年に日興上人の弘教の縁にあわれて御弟子入りを熱望なされ、建治二年、身延山に上り剃髮されました。

身延では、七か年の間、大聖人さまにおつかえ申しあげ、毎日いくたびか谷川の水を頭にのせて桶を運ばれたので、自然に頭

がへこんでいたといわれます。

また非常に巧妙な弁論家であらせられた。弘安五年十月、大聖人が池上で御休憩の折、叡山の二階堂伊勢法印が問答にのりこんできた。大聖人は目師にその対論を命じ、大衆の面前で堂堂と相手の邪義をつき、屈伏せしめたといわれます。

永仁元年七月には、鎌倉將軍家の殿中で十宗房という名僧と問答されて、浄土宗の邪義を破折されました。

大聖人御入滅の時には、墓輪番十八人の一人に加えられました。日興上人の身延離山に当っては御直弟として御伴し、大石寺の創立せられるや、蓮藏坊を建立して守護に当られています。

新田家の本領は奥州登米郡で、日目上人は再三往來して折伏弘通に当られ、今日まで奥羽地方には多数の寺院が残っております。

日興上人は、日目上人が行体堅固で特に傑出なされていることを認められ、正応三年十月、御座替り本尊を授けられました。日興上人が重須へ移られてからは、實際上の大石寺の主であらせられました。

日目上人が御關山上人のある時は御名代としてある時はその片腕として、一味同心に正法弘通に当られた御姿を拝してみよう。日目上人の弟子日尊は、同じ奥州の出身で、折伏弘通には熱心だったが、法門に誤まりがあった。そこで日興上人から十余年の間破門されましたがようやく許されたころ、日目上人は奥州へ旅行なされた。

この時に重須に在る日代にあてて、日興上人に申し上げて下さい、との趣旨のお手紙が、今日残されております。

その内容は日尊は以前は神天上の法門を守らないで、謗法者と同じだったが、最近では神社参詣を禁じているとの風評ですから、心配なさらないで下さい。

また日尊と日目上人が仲たがいでいるかのようにいうものがあるけれども、そんな心配はない。ただし日尊がもし重須へ行ったら神天上の法門を身にしてみるように厳戒して下さい、等との意味のお手紙です。

また日目上人は師の御代官として、京都に鎌倉に国家諫曉をなされ、天奏が四十二度にも及んだといわれています。

元亨四年十二月二十九日には、日興上人から「最前上奏の仁・卿阿闍梨日目」との御本尊を賜われ、同じく正慶元年十一月三日には「最初上奏の仁・新田阿日目に之を授与す一が中の一弟子なり」との御本尊を賜われています。

最後に日興上人は「日興跡条々事」として、弘安二年の本門戒壇の大御本尊を日目上人に授与あそばされ、一切の御付属を終られて正慶二年二月七日に御遷化あそばされました。

同じく正慶二年（元弘三年に当る）の五月には、北条氏が滅亡して政権は京都の朝廷へもどった。

日目上人はこの時こそ広宣流布の時と確信なされ、同年十一月に七十四歳の御老休にもかかわらず、日尊・日郷の二人の御弟

ので、頂師もその義子となったという。
 真間の弘法寺に住していたが、大聖人滅後、内紛を起して富木氏と別れ、日興上人を募りて富士へ移り正林寺で遷化した。
 門徒存知の事で「日興が義を盗む」と真間時代のことを被折されていますが、そのほかこれといった史料は残されておりません。

蓮華阿闍梨日持

駿州・庵原郡松野の生れ、松野六郎左衛門の子で、南条家とも親類に当る。蒲原荘の四十九院に上り、日興上人の弟弟子だったので、大聖人の御門下に帰依し、苦難の迫害をともに闘いぬいていた。

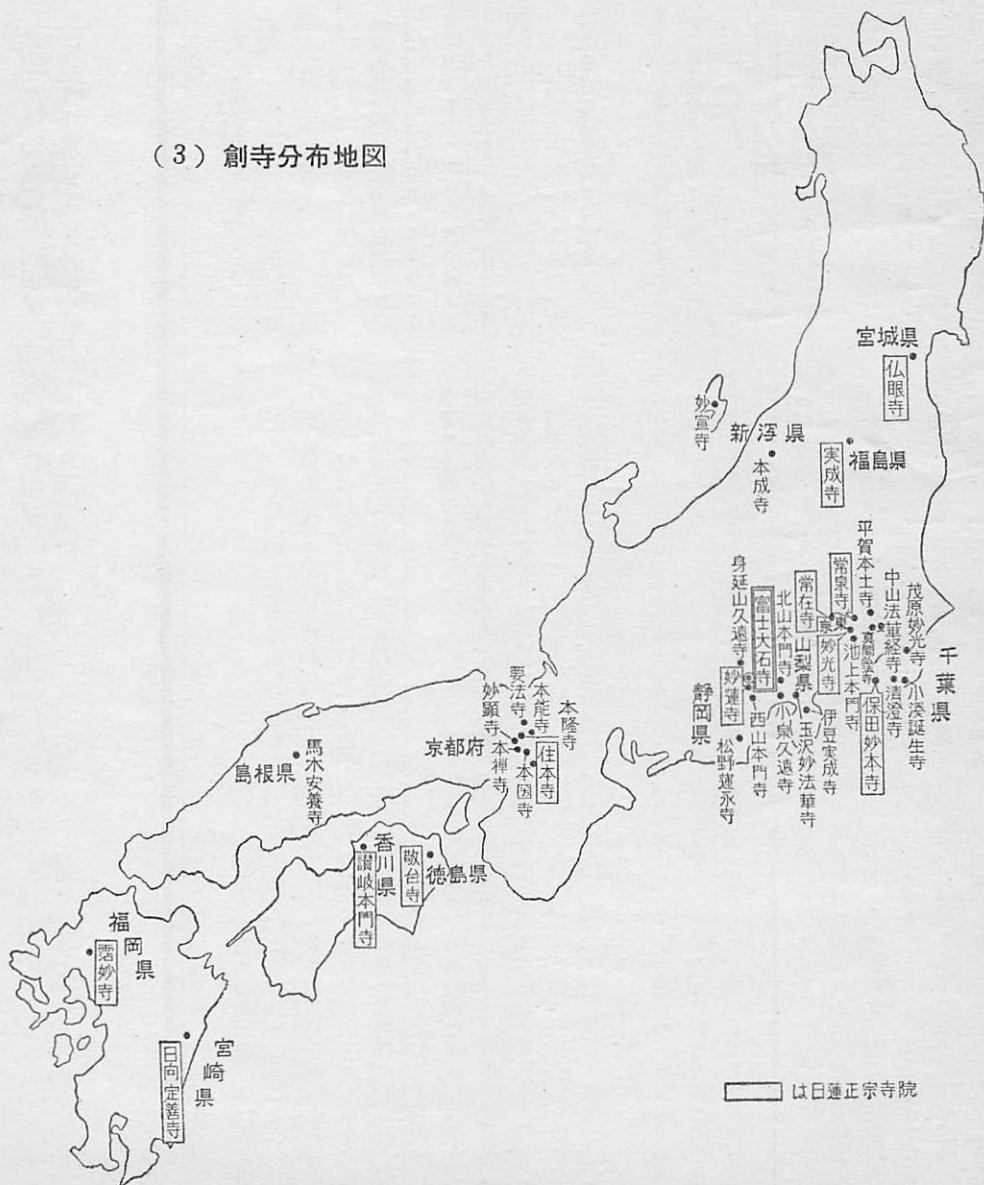
大聖人御滅後は日興上人に背き、鎌倉の軟風に同調した。後には松野の蓮永寺をゆずって弘通の途に上り、北京から外蒙までも行ったという。ただし本尊や教義はもとより、その行動にも明確な史料がない。

(二) 各教団の概観

以上の六老僧が主体となって各教団が発展し、また離合集散が重ねられてきました。今その概観を、堀日亨上人「日蓮各教団の概観」(大白蓮華第十一号)に掲げられた図表を、もう一度、若干の手を加え、わかりやすく組んで、再掲させていただきます。

日亨上人の原因は、教団名を明治末期の比較的安定した時期にとられています。

(3) 創寺分布地図



富士宗学要集の解説

⑬

富木公胤

第二卷 宗義部の一

(ヲ) 五段 荒量

『隠れたる左京日教師

六、五段荒量の要領』

自然鳴誌二卷六号に

堀日亭上人著わす

「五段」とは、自宗および浄土・真言・禪律の五宗にして、「荒量」は著者の謙下の辞、五宗の要文をあらあら集めたるものなり。末文に、

右富士五段の事は、忝も開山上人の御籍聚なり、今推量を以て之を記す、正文潤合の事は有るべからず、只稽古の爲なり、龜鏡と成すべからざるなり。時に長享 戊申大簇十二日

六十一戊申 日教 在判

(富士宗学要集二卷三〇〇頁)

とあり、興師の諸類聚ありしも、すでに、当時は、散逸したりしか。しかるを、日教推量して要文を聚めたるなり。

現存古写本(中尾)の目録によれば、自宗、新衛飛雲勢須経壹式参肆伍陸漆捌玖拾佰仟万億イロハニホヘトチリスルヲワカヨタレンソツ子ナラムウキノオクヤマケフコエテアサキ、已上六十二条

浄土、ユメシエヒモセス玉メ為論半人本篇頓沉輪奴類御倭呵与、已上二十六条

真言、他連損都念難乱開雲院野汚俱耶滿現分金円伝秋參機油面民新緑一貧一、已上三十一条

禪、門泉須鏡城日作叔国銀質発君從尹ロハニホヘトチ、已上二十三條

律、リスルヲワー一、已上七條

合計百四十九條ありて、目録の番号にはイロハニ種々の字体を用い、且つ経玉メ鏡城日作等をも加えあり、当時の通例と見ゆるも、浅見の小沙弥には、いまだ日作等を他書に見たることなし、并前二後三の事まで、自宗部二十七條ありて、已後の大部分

を欠せり。

ことに、イロハ順をもつて記したるものが、新に始まるべき謂れなければ、この写本なる時は、前のイよりミにいたる四十一条は、すでに佚したるものか。

学優の抜書には、

右此の抄は大石寺宝蔵の中より之を書写し畢りぬ、五段の中に法華浄土の二宗は大概を取りて略して之を書す、自余の三段は写書の如く全く之を写す云云。

……洛陽要法寺沙門学優

(富士宗学要集二卷三〇〇頁)

との典書あり。多分、現存の古写本に依りしものとみえ、首上同文なり。浄・真・禪・律は、ここに用なし、惜しむらくは、現存本にては、自宗の下においても、改めて掲出すべきの文なし。散佚の分には、何かありしならん。強ちに逸げた魚は大なりとかの感のみにあらざるべし。今、この抄の下唯一條を引かん。即自宗の下の第伍の條なり。

伍、聖人九箇年の御隨居の時は六老僧達の採葉汲水の事有る故に今に至るまで断えず行木を截り御薬料を摘み之を捧ぐ昔を学ぶ計りなり、行木を負ふ事重ければ辛勞と思へば還つて無行に成るなり、当寺は住寺も御代の中に何度も行山へ入り給ふなり、夫れ行跡は多少には依らず信のなし物なり、少しも聊爾有るべからざるなり。乃至、
聖人の御時・南条の不行(時光)祇候有りけるに、何にても御もてなし無くして生芹一折敷下されけるに聖人聞し召す故に大行も一折敷を枯葉の一も残さず御賜わり給う、御好み有りけりと仰せ出だされ又一折敷づつ、聞し召し下されけり、何れも信の事は斯様にこそありたらまし物を。
上代行跡を為し給ふに日目上人は御頭の頂き平らかに御座す、聖人御造作の御時粟粥を頂き給ふ故に、又盲人を余多召し置かれ無かり給ひける程に、毎度彼等が粟粥食いたる御器を洗うが笑止なりと仰せけるとなむ、殊には日目上人は四十二度の御天奏最後の時、近江の篠原にて御

遷化なり、信行親の行者にて御座すなり。乃至、

爰を以て当住寺に御座候も父母の御志の日は木を焚り湯を沸かし寺僧に御供養あるなり、在家には施は安く行は堅し出家は行は安く施は堅し云云、此の事大切なり、故に我が宗は行跡の宗旨なり、諸方よりの供養物は仏物なり、争か公を以て私を御計いあらんや。

(富士宗家集二巻二九六頁)

と行体第一の化儀は有師の各聞書に散見する所にして、日教師亦此れを唱導せられたり、案ずるに吾門本末の行体徒らに徳川時代の華者を受けて、加うるに現代の悪風潮を以てし、迪も宗開三祖の昔に及ばざるや、遠しとも遠し。吾人大いに、猛省せずんば本仏大靈の冥罰を受くべし。

実にも目師の御行体は畏れ入りたることにて、開山上人の御讓状に讃歎せられたるのみならず。七十四老の最後の天奏長しとも畏し。而るに、此れについて、本抄には篠原遷化と記す。宗門古来、目師系に属する要法寺、妙本寺、久遠寺、いずれも吾山と同じく垂井遷化を以てし、房山我師の詩というものは、「垂井水寒没命裏」とも、「残碑剝落已苦毒」ともある。これが事実ならば、我師の時代に碑あって、すでに苦蒸したり。

また要山陽師も垂井に詣せんが如しといえども、要山陽師が元和三年に本寺大石寺に詣でらるる途中に、垂井の古跡を訪われ

たるときは遂に所在不明なり。しかるに、今の碑は享和三年、要山門徒の新設に係り

陽師已後、百八十余年を距て、其の中間、何人か発見したりしや明らかならざるのみならず、目師は隣村府中村即旧垂井にも古蹟あり。また近古にいたり、垂井の武市某の宅に遷化せられたり。現に其に授与の板本尊現存すと冒稱するものすらあるに至る。慎しまざるべけんや。ただし納骨所にもあらず。単の火葬場の事なれば、的確に間尺を争いて、其の地を評定せずとも、漫然その英蹟を追慕すれば可なりと云わば云え、垂井と篠原との相違は如何にせんや。我師の詩、辰師の記、事実なりとするもの其れよりも数十年前に、本抄に明らかに近江の篠原とせるを、如何にして打ち消さんや。現蹟保持のためには、願わくは本抄上の史料を得たきものなり。あえて大方の識者に乞う。

(以上、自然鳴誌に掲載の隠れたる左京日教師から)

公胤私に云く、日亨上人は生前、御研究の結果、「左京日教師は、目師の遷化地を篠原というもこれは間違いで、正確には垂井である」と云われていた。読者諸賢、誤ることなかれ。

堀日亨上人の仰せに云く、

「穆作抄は満足に残っている。日本の要集にあるものは略してあるが、略さないで、

写本の通りにした方がよいと思つたのは、刊行後の後悔で、いたし方がない。左京の五人所被抄の欠本になつてゐるもので、晩年にできたものがあつたが、それも、今はノートを、どこへやったか、わからず、困つてゐる。これも目録を見ると、ヘンテコである。

富士五段というのが、古くからあつた。大聖人には四箇の格言がある。四箇の格言は、後には、あまり使用しなくなつたが、これに富士からの批判を加えたものが、五段になつて、富士五段といふのである。

御開山上人の作といわれている綴帖本で南北朝に近い戦国期にできたものと思われぬものがある。左京は、これを、開山上人の御籍聚といつてゐるが、さように信じて一向に差しつかえがない。

内容は四箇格言は明細でなく、美濃紙の四つ折の四十か五十くらいで、いたつて、荒っぽい編纂ものである。これを台本にして、左京が延ばして書いたものである。これが「あらまし」といふ義であつて、左京自作のあらましではない。

数字の目次と、イロハの目次とあつて、イロハは万葉ガナを使用したものと、古風の略したイロハの目次とがある。古風のイロハと、万葉のイロハの二通りが、別々にある。古風のイロハは、今は残つてゐない。万葉流ではなく、簡略な弘法流の変つたものである。これが、五段荒量には混つてゐる万葉ガナと、平易なイロハの目次があつた。その上、一二三四の数字の目次の三通

りあつた。

それが現存本では端本となり、三通りの目次が雑然と混合したものとと思う。今残つてゐるのは、一四九条になつてゐる。

一集、二集、三集、四集の五段荒量があつて、現存本は、バラバラになつて、欠本になつてゐる。今はバラバラになつておつたものを、編集したものである。箇条書によつて想像すると、相当、龐大なものであつたと思ふ。

法門の上からいつても、バラバラで、目次と内容とは、なんらの順序や関係があるわけでもない。イロハ、一二三と、次第に考え覚えて行くといふものでもない。内容も、法義の難かしいものはない。しかし、まれには、われわれの行体に関係のあるものがある」

(以上、堀日亨上人の仰せから)

いくども説かれた日興上人

日興上人さまは、御書の講義中に入つてきた一人の人に対して、また、同じことを、くり返して法門を説かれたという。そして、

まだかぬ人のためにはホトトギス幾度なくとも初音なりけりという御歌をよまれたといわれる。このことは、在京日教師の類聚翰集私という著書に、くわしく出ています。なお、この書の解説は次号に出ます。

大獅子吼する七百年前

— 大聖人御在世中の対邪宗問答 —

立宗七百年は、前進の年である。そして、邪宗撲滅への前進は、本年の重要な闘争目標のひとつである。会長戸田城聖先生は、かつて総会の席上で、

「宗教に妥協はない。創価学会はいかなる邪宗教とも、妥協はしない」

蜂起する三類の敵人

末法の御本仏日蓮大聖人さまの御一生は、息つく間もなき、邪宗との闘争の連続であった。

「念仏は無間の業なり、
 禪は天魔の所為なり、
 真言は亡国の悪法なり、
 律は国賊の邪法なり」

この四句をめぐって押し寄せる敵は、飢えたる狼のごとく、獲物をねらう鷹のごとく、ミツに集まる蜂のごとく、その数を知らず、残忍非道、スキあらば攻撃をくわえんものと、虎視眈眈としてねらっていた。

この群がる敵軍にたいして、荒海のなかにただひとり立てる巖のごとく、百獸を睥下する獅子王のごとく、微動だにもされることなく、妙法五字の剣をふるって、立ち向われたのである。

まずその結核は、完房の国長狹郡東条の郷にある清澄寺に始まる。

と宣言なされた。一切の不幸の原因である、邪宗邪義との闘争は、学会の歴史のすべてであるといってもよい。いまここに、日蓮大聖人さま御在世よりの、種種の闘争をしのぶとともに、いよいよ不自信身命の決意を固くせんとするものである。

「いま、この亡国の悪法真言が鎌倉へ来て、日本国をほろぼそうとしている。

その上、禪宗や浄土宗は、いうまでもなく間違った法である——このように悪口をいえば、日蓮の生命は危険になるであろうが、自分のためではなく、ただ、ひたすらに、国のため、一切衆生のために、かくいうのである。

建長五年四月二十八日、安房国東条の郷の清澄寺で、師匠の道善房の持仏堂で南面して、浄円房始め、少少の人にこのことをいってから、いまにいたるまで二十余年間、四箇の格言を説いてきているのだ。ところがこの間、松葉力谷の草庵で焼き打ちにされたり小松原において額に刀傷をおったり、伊豆・佐渡へ流罪になったりした」

〔清澄寺大衆中〕御書八九四頁

このようにおおせられているごとく、立宗いらい、大聖人さまの御身には、種

種の難が連続してふりかかっている。まず、文応元年八月、大聖人さまが三十九歳の時、立正安国論を、執権時頼に奉つてより一か月半の後、念仏の坊主の陰謀は幕府の役人数千を動かし、大聖人さまの住せる松葉力谷の草庵へ押しかけ夜陰に乗じて火をかけ、殺害しようとした事件が起こった。

ついで、翌年五月十二日、伊豆御流罪となった。極楽寺長時の理不尽な処置について、大聖人さまは、かならず一門の亡びることを予言され、また、政道のすたれたのを、おなげきになられている。

さらに、文永元年には、安房に帰り、御母君の病をなおされているが、その年の十一月には、小松原の難にあわれ、東条景信はじめ数百名に襲われた。大聖人さまの手勢は、戦える者わずかに三、四名であった。まことにはげしいものであったらしく、工藤吉隆の手のものが、五十余名馳せ参じ、その外護により難をのがれた。大聖人さまも額に疵をおわれ、鏡忍坊、工藤吉隆は討死をした。

これらの難にも屈せず、さらに、大聖人さまは、文永五年にいたり、うち続く大難と、あいつぐ天変地天、ならびに、大蒙古国よりの驍状に関する風聞に接し、ますます邪宗撲滅への御決心は固く、有名な十一通御書を発して、時の権力者に、それぞれ御確信をのべられ、国の前途を憂えるの情を示され、公場対決を強くせまられたのである。

狂った幕府、国を亡ぼさんとす

他国侵逼の萌芽あらわれる！

蒙古国王クビライは、対馬、大宰府をへて都に來り、書翰を奏上した。

「もしわれに従わずんば、ただちに兵をもつてのぞまん」との、文相は通好を勧めめるに、実は、貢賦をうながすの書であつた。

これと時を同じくして、日蓮大聖人さまは、執權時宗の面前において、諸宗の高僧をめして公場対決せしめよ、との十一通の御状をおしたためになられた。建長寺道隆、極楽寺良観、浄光寺行敏、長樂寺隆観等七寺には、対論をもとめるとともに、執權時宗、執事平左衛門、北条弥源太には、邪宗を早くしりぞけんことをうながしたのである。

——時に、文永五年十月十一日、日蓮大聖人さまが四十七歳の御時であつた。

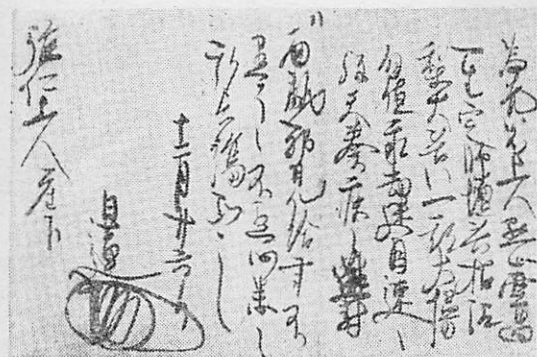
大聖人さまが、このように強く公場対決をのぞまれたのは、国を憂える心情とともに、すでに戦わずして敵に勝つてしまっている大獅子王のごとき気概をもたれていたのである。御書にも、強仁という真言の僧が、個人的に法論を申しこんできたのに対して、「公場にのぞまずしては法論を行わない」という御返事を出されたのをもみても、大聖人さまの大確信

のほどがうかがわれる。

この蒙古からの挑戦は、これより八年前、天変地天、飢饉疫癘天下にあまねき、さながらのろわれたる光景の鎌倉の町々を見て、立正安国論に予言した他国侵逼の難が、現実化したのである。

これが、大聖人さまが幕府に対する第一回の国家諫諭であつた。しかるに、立正安国論を無視したばかりに

強仁に公場対決を促した大聖人のお手紙



りか、十一通の御状にもそっぽを向いた幕府は、ますまず追いこめられた邪宗の坊主どもにせ、ん動され、さらに理不尽なる行動に出たのである。その様は、さながら「悪鬼入其身」との経文どおりの姿であつた。

それは、夜もトツブリとふけ、虫の音が秋空に冷たくくびいていた、文永八年九月十二日のことであつた。

鎌倉にある大仏武蔵守宣時の邸から、ハダカ馬にのせられた大聖人さまは、多数の武士に囲まれて、大路を西に下って行つた——行く先は、龍の口の死刑場である。

「頭破作七分」となった平左衛門は、上へは佐渡への漂流という名目で、その実は、ひそかに大聖人さまを亡き者にせんとしていたのであつた。

月はおちて海は暗く、七里カ浜の波は、寄せては返して、ゴウゴウと鳴りひびき、腰越の宿、龍の口の刑場は、真の暗闇に、莫々たる砂浜が不気味にひろがっているだけである。

「法華経に身をかえるのは、糞に金をか

えるようなものである」と、從容として首の座についた大聖人さまは、突如として江の島の方から飛び來つた「光り物」に生命をすくわれ、末法の御本仏としての頭本をなされたのである。

この時において、第二回目の国諫がなされた。そして、最後の第三回目の国諫は、文永十一年四月八日、佐渡の流罪から鎌倉にお歸りになられた直後、平左衛門を始め、いならぶ幕府の役人どもを前にして行われた。

とくに平左衛門が質問した、蒙古国襲來の時機について、「今年中に……」という大聖人さまの御返事をも、真剣に考えなかつたため、ついに、その年の十月と、七年後の弘安四年には蒙古軍が大挙襲來し、壹岐対馬を侵され、九州にも上陸され、あわや日本国の運命が風前の灯になるといふ、国史上未曾有の大危機にみまわれたのである。

これはすべて、「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」といふ、大獅子吼にそむいたことに原因したのである。

塚原問答に恥さらす邪僧徒

日蓮大聖人さまの諸宗との問答で、規模の大きいものといえば、佐渡の塚原問答である。

文永八年の佐渡は、一面の積雪と、はげしい風のうちに暮れて、きびしい大自然との闘争の生活を過してきた、そまつ

な三昧堂にも、新年がやって来た。

そのころ、佐渡の国の、持斎・念仏者である唯阿弥陀仏、生輪房、印性房、慈道房等々という連中が、数百人相い寄り協議しているという噂が伝わってきた。

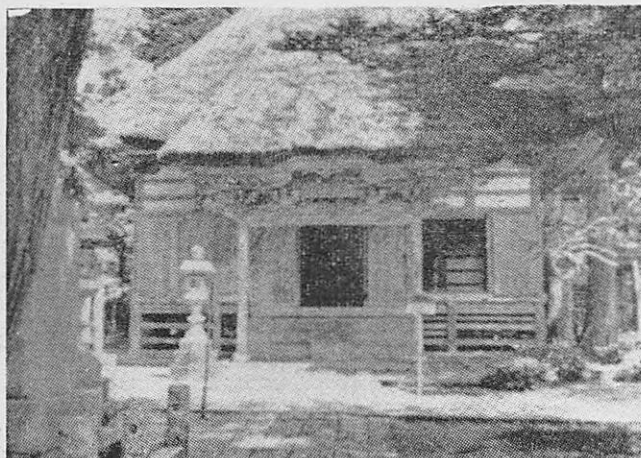
「日蓮こそ一切衆生の悪知識だ」

「阿弥陀仏の大怨敵だ」

「どうせ佐渡の流人は、生きて帰った例はない」

「万が一、生きても本国に帰れるはずは

塚原三昧堂（大聖人当時のものではない）



ない」

「どうせ、一人で塚原にいるのだ、殺したからとお上からさしたる御咎もあるまい」

「やってしまえ！」

等々、過激なものであった。やがては、それがこうじて、守護所にまで談じこんで来るしまつてであった。

そこで、地頭の本間六郎左衛門尉は、「日蓮の御房は、お上より殺し申すまじき副状が来ておる。決して蔑ずるべき流人ではない。過失があればこの重連が大なる失となる。よって、ただ法門にて攻めたらどうか」

と云った。

そこで、勢いこんだ念仏者どもは、浄土の三部経や、止観だの、真言だのを頭にかけてたり、小脇にかかえたりして、正月の十六日に続々と集まって来た。

佐渡は申すに及ばず、越後、越中、出羽、奥州、信濃の各地から集まって来たというから大変なものである。塚原の堂の大庭も、山野も、数百人の人々でうずめつくしたといわれる。

集まった各宗各派の坊主は、教をたのんで、それぞれに、大聖人の悪口をいったり、天台の法門には、かなうまいなどといって、氣勢をあげる。

一方在家の衆は、「阿弥陀仏の敵め、早くやつつけてしまえ」等とわめきちらして、その声は一つになって、あたかも、雷電のごとくに、佐渡の天地に響いたほどであった。

大聖人さまは、ゆうゆうとして、謗法の法師や、在家の者どものざわめきを御覧あつて、

「各々方、静かになさい。今日は法門の御ためにこそ態々お出でになったのではないか。はしたない悪口雜言こそ心ない業である」

とたしなめられた。

実に、この問答は、利剣をもって瓜を切り、大風の草をなびかすがごとくに、勝負にならないものであった。

「止観や真言や念仏の法門を、邪宗の僧がいうことを一つ一つ破折し、詰問して、一言、二言、三言、ただで、打ち破

日興上人、十六歳で一寺折伏

つてしまった。鎌倉にいる真言、禪宗、念仏、天台の僧よりも、ずっとくだらないものどもばかりであった」

〔種々御振舞御書〕御書九一八頁〕と御書にあるから、大聖人さまの實力を知らぬ、イナカの坊主どもが、いかにキモをひやし、もん絶し、恥をさらしたかは、想像に難くない。

その結果におどろいた坊主たちの中には、反省もなく、悪態をつくす者あり、あるいはあぜんたるあり、あるいは、念仏は間違っていたから、今後は唱えませんと申す者、あるいはその場で、袈裟や念珠を捨て、念仏を申さぬ、と誓状を書く者等々、様々であった。

かくて、塚原における問答は、邪宗どもを完ぶなきまでに打ち破った、大聖人さまの大勝利に終わったのである。

弘長元年、日蓮大聖人さまが伊豆御流罪のとき、日興上人さまは苦難をともしされながら、伊豆の地を折伏してまわられた。そして、熱海においては、真言宗の僧、金剛院行満を法論のすえ打破り、大聖人さまの弟子とした。行満は日行と称せられ、その寺を大乗寺と号した。この大乗寺の開山と仰がれた日興上人さま

は、そのとき、わずか十六歳の青年僧であられた。

日興上人さまは、大聖人さまのあらゆる闘争に、体に影のそりがごとく、いつも参加されていた。佐渡でも、鎌倉でも、身延でも……。

日目上人さまの入信も、日興上人さまの御力による。文永十一年、ふたたび伊

豆の折伏に向われた日興上人さまは、真言の大寺、走湯山の円蔵坊をおとすれた。そこには南条時光殿の親類にあたる新田四郎信綱殿の弟、五郎虎王丸（日目上人）がいたためである。山内随一の学者、式部僧都を、「無間地獄の主は、御房のことか」と、語気するどく破られる日興上人さまのお姿を見て、少年虎王丸は「わが寺の学頭より、はるかに勝れられた名僧、この方こそわが師」と心に感じ、濁仰の思いで弟子入りを願った。そして建治二年十一月、身延に日興上人さまをたずね、大聖人さまの門下となった。熱原法難は、日興上人さまの大折伏によって起されたものである。四十九院、

問答第一、日目上人

「日興に物かかせ、日目に問答させて、また弟子ほしやと思わず」

「問答第一、日目」

「日目はいつも、幅さしなれば……」
これは、大聖人さまが、日目上人さまを信頼されて仰せられたとして、古くから伝えられているお言葉である。

身延で七年間、大聖人さまのもので修行をばげまれ、給仕第一、実践第一といわれた日目上人さまは、また問答第一でもあられた。

大聖人さまの代理で池上問答

実相寺、滝泉寺等において、日持、日華、日仙、日伝、日妙、日位、日秀、日弁、日禪、日源等の俊鏡は、あいついで日興上人さまの弟子となった。滝泉寺の院代行智はこれをうらみ平左衛門尉等の官権とくんで、ついに熱原法難がおこされた。無実の罪でとらえられた二十人のお百姓は、三人の斬首にもビクともせずすさまじい強信を示した。

大聖人さまは日興上人さまの弘教の熱誠と、法難に対して一步もひかぬ大闘争を賞され「まったく出世の本懐満足の時なり」と申され、弘安二年十月十二日、本門戒壇の大御本尊様を御建立あそばされたのである。

弘安五年九月、池上で御休養中の大聖人さまのもとへ、伊勢法印という大学僧が數十人の弟子をひきつれて、問答のりこんで来た。法印は比叡山で教学を積み、幕府の高官二階堂伊勢守の子という親の権威をカサにきていた。

おそばの日昭、日朗等の老僧は、「だれが問答に出ようか」と、大いに驚かれた。大聖人さまは、何とも思われず、

「それは、いと、たやすいこと、卿公（日目上人）に相手させよ」

と命ぜられた。大聖人さま御病氣中の代理として、伊勢法印に向われた日目上人さまは、大勢かたずをのんで見守る中を、ゆうゆうと破折に入られた。

そして第一に「即往安樂世界阿弥陀仏」の論争から始まって、第十番の問答まで、一々に法印を屈伏させて、一同の大歓声は池上殿の邸をゆるがせた。法印は、

「いまの仰せ心肝にそめて、わかりました。私の及ぶところではありません」と再三、日目上人さまをたたえつつ、スゴスゴと逃げ帰った。

報告をきかれた大聖人さまは、にこにこ、うなづかれ、

「さればこそ、日蓮が見知ってこそ、卿公（日目上人）をば出したれ」とおおせられたという。

時に日目上人さまは、わずか二十三歳の青年であられた。

殿中間答、鎌倉中の評判となる
さらに永仁元年の七月、大仏陸奥守の探題のとき、鎌倉將軍家の殿中で、西脇の道智房世に十宗房という学僧と問答せられた。古い記録によって、問答の一部を、あげてみよう。

十宗房 念仏無間の業とは、いかなる経文であるか。
日目上人 何宗の立場で問うのか。
（と逆襲されたので、あわてて）
十宗房 浄土宗、浄土宗、浄土宗。
（と三度いう。日目上人は追討ちをかけ）

日目上人 浄土宗では法華経を抛てというが、いずれの経文か。
十宗房 （しばらく考えたのち）そのようなことは、まったく言わない。聖道門を抛てと法然上人が書かれたのである。これは経文ではないが、法然上人の念仏のみ、機にかなない時にならうのである。
日目上人 聖道門とは、何であるか。
十宗房 真言、禪、天台である。
日目上人 天台とは、何であるか。
十宗房 天台とは法華経である。
日目上人 それならば、法華経を抛てと云ったのではないか。
（前には「まったく言わない」といったこととの自語相違をせめられ、すつかり、つまってしまつて黙して語らず。しばらくしてから）
十宗房 法然上人の後の念仏を、しばらくおいて、法然上人の前の念仏について問答したい。

日目上人 法然の前の念仏は機なく時がすぎているゆえ問答の必要なし。法然の後の念仏こそ、問答すべきではないか。

道理にかなった、たくみな日目上人さまの追究に、なみいる万人は、「道理、道理」と称嘆した。こっぴどみに打ち破ったこの問答は、鎌倉中の大評判となった。そして、藤原忠職という幕府の役人はじめ、座につらなつた人人は、きそつて日興上人さまの弟子となつたのである。これ、有名なる殿中間答である。

御書講義の指導から

創価学会の勝利は

間違いない

總務 池田大作

(「十字御書」
御書「四九二頁」)

よく会長先生が「滅びゆく人生、のびゆく人生の二通りにわかれている。のびゆく民族、滅びゆく民族の二つにわかれているんだ」と、おおせでした。

御本尊様をしっかりと拝んで、正月を祝い、そしてまた、一日一日を生きていくことは、太陽が東よりけらんらんとおぼつて、西を照らしていくがごとく、一軒一軒、個人個人が、偉大なる功德と、発展の人生を歩んでいけるという意味です。夕日のように、だんだん、貧乏になって、病気になる、苦しんで、さびしい人生を歩んでいくんではない、邪宗ですそれは。日蓮正宗の信者は、太陽ののぼるような元気で、これからの人生を生きいてけるんだよ、とおおせです。

そして、福運もまさっていく、人からも愛されていく、すなわち、福運がまさ

っていくなければ、どんなに努力をしても、生活は向上しないんです。御本尊様を拝み、折伏をするということは、どんな方法でもうるることのできない福運をつんでいるんです。

うんとお金をもって、リップになつて、人のためにつくして、そして、健康であるならば、みんな、ああいいなあとうらやましがります。その根本が、御本尊様を拝むことです。

末法の功德は冥益です。毎日毎日を見てみると、功德がみえないんです。だが七年、十年、十五年、二十年と信心を重ねてくるならば、ああこんなにも大功德を受けたか、こんなにも幸せになつたかと、わかるんです。信仰は、一生の問題です。三年や、五年や、そこらで、はかつてはならないんです。

いまわたしたちは、大聖人さまのおおせのとおり、お正月に、大御本尊様にお目どおりできるといふことは、最高の福徳をつんでるわけなんです。お正月でも、そうとう大ぜいの人は明治神宮へ行つてます。皇太神宮へ行っています。何十万の人が、成田の不動さんへ行っています。みんな行く所がないんですよ。心の奥では、何か信仰したい、そういう心はあるんです。

みんなわからないんですから、早く救つてあげて、ホントウの幸せになる道は、富士の大石寺ですよ、といいきつて

いきましようよ。

われわれ凡夫は、鏡を見れば見えるけれど、自分では、マツグは見えない。虚空というのは宇宙です。宇宙なんて見ませんよ、と同じようなものなのです、われわれの存在は。日蓮大聖人さまは仏さまです。末法の御本仏さまでいらつしやいます。「委細に三世を知るを聖人と云う」過去遠劫から、尽未来際まで、一切のことは見とおしていらつしやるんです。われわれは、あすの命もわかりません。だから、日蓮大聖人さまのいうことを信ずる以外にないんです。わかりやしませんが、すよ。

末法の悟りは、信の一字なんです。どんなことがあつても疑われない、「無疑曰信」「疑いなきを信」といふ疑われないで、信ずる、それしかないんです。それを、日蓮大聖人さまは、こうだ、ああだ、創価学会はどうも折伏が強すぎるなんて、文句なんかいう資格ないんです。日蓮大聖人さまを批判する力なんてありません。すなおに信心しきる人が、仏になるし、幸福になるんです。それでいきましようね。

「わざわざは口より出でて身をやぶる」これは気をつけましようね。

あの人がどうの、この人がどうの、知りもしないで批判ばかりしたり、いじめたりする、そういう人は、自分から滅

びていくんだ。日蓮大聖人さまご在世當時においては、日蓮大聖人さまを迫害した人は、全部滅亡しています。

また、今世においては、牧口先生、戸田先生を迫害した検事とか、軍部とか、みんな身を滅ぼしています。学会の中においても、功德をいだけないような人は、なんやかやと怨嫉や、うらみや、にくしみや、誹謗や、いっぱいあるんです。「さいわいは心より出でて我をかざる」福運は心より出る、信心です、信心の心です。身をかざる、幸福になる、物心ともに幸せを築くことができる。心の底から信心し、心の底から御本尊様にお仕えし、真実の心をもって人生を生きていく、その人が勝利者になるんです。

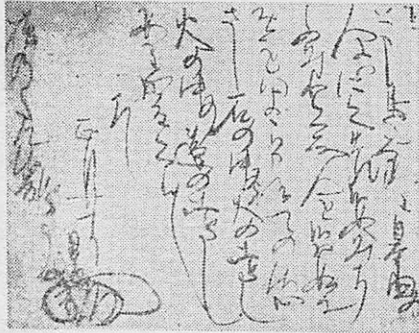
心が一番大切だとおおせです。だれが見ようが、見まいが、御本尊様につうずる一念の修行があれば、その人は幸せになるんです。

新聞でなんといつてたかれようが、俗衆増上慢が、いくら叫ぼうが、道門増上慢が、しゅん動しようが、借聖増上慢が、いかに弾圧をくわえてこようが、心より御本尊様を信じて、広宣流布に向う創価学会の勝利は、絶対間違いないという文証であると信ずるんです。

断じて、日本の国を守り、日本民族の幸福を願ひ、全世界の真の平和を願つて、戒壇建立することを誓ひ合つていこうではありませんか。

御書の対告衆と大聖人の御指導

③ 松野六郎左衛門入道殿



松野尼御前に賜わった大聖人のお手紙

条時光殿の祖父と

白雪をいただく清らかな富士山のふもとには、殺ばつな世にはめずらしい、あたたかい信心が、ふくいくたる薫りをはなつて、つづけられていた。

時は、今から七百年前。

人は、日興上人を法将にいたたく数多くの優秀な青年僧侶と、南条時光殿を中心として南条、新田石川、松野、西山家等の人人、近在の多くのお百姓さんたち。

しかも、ひとたび熱原法難をまき起こしては、死をも恐れぬ、強く厳しい信心をつらぬいた。

僧俗一致のお手本

「信心は大聖人様ご在世に帰れ」と会長戸田先生は、いつも、おおせられていた。

七百年前、御本山富士大石寺の

帯では、真の僧俗一致の大折伏が、たえず行なわれていたのである。

松野六郎左衛門入道殿も、このなかの重要な一人であった。

日持上人の父として、若き斗将南

して、第三祖日目上人の曾祖父として、また第四日目道上人の曾曾祖父として、大聖人様の信心に励まれた方が、松野殿である。

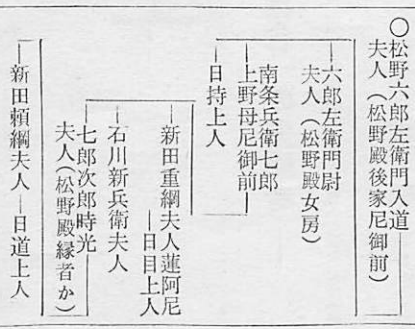
松野殿の息女が、南条兵衛七郎殿の夫人となった縁によって、日興上人および時光殿に折伏されて入信したのであろう。

そして、松野殿の子息、日持上人は、日興上人の最初の弟子となり、ついには六老僧の一人に数えられるまでになった。

妙法尼、刑部左衛門尉女房も、松野殿の一族と思われる。

富士川の西、庵原郡松野に住していた。

松野一家の系図



松野六郎左衛門入道殿は、夫人をのこして、弘安のはじめごろ、一族の強信者に見守られながら、安らかになくなった。

いただいたお手紙

松野六郎左衛門入道殿、および夫人、子息の六郎左衛門尉、同夫人、あるいは一族のいただいたお手紙は次のとおりである。

- 松野殿御消息(建治二年)
- 松野殿御返事(建治二年)
- 松野殿御消息(建治三年)
- 松野殿御返事(建治三年)
- 松野殿御消息(建治四年)
- 松野殿御返事(弘安元年)
- 松野殿後家尼御前御返事(弘安二年)

野母尼御前がいただいたお手紙も多い。

もっとも有名なお手紙の一つ、松野殿御返事(建治二年)は、十四誹謗抄という別名のように、十四誹謗は在家出家にわたって恐るべしと訓戒あそばされている。

- 十四誹謗の中で、最初の十までは、ただ一つの正法、日蓮大聖人の仏法を信じない人の罪である。
- 日蓮正宗創価学会員として御本尊様を信じ、朝晩の勤行に励み、折伏をやっている人は、このような誹謗はないのである。すなわち、一に憍慢(おごりたかぶって信心しない)
- 二に憍怠(なまけて入信しない)
- 三に計我(我見で邪宗をやる)
- 四に浅識(御本尊様の功德がわからず信心しない)
- 五に著欲(目先きの欲にとらわれて信心しない)
- 六に不解(正法を知らない)
- 七に不信(正法を信心しない)
- 八に齷齪(学会員を嫌う)
- 九に疑惑(御本尊様を疑う)
- 十に誹謗(御本尊様をけなす)
- ただし十一に怪善、十二に憎善、十三に嫉善、十四に恨善とは、学会員であっても、御本尊様および同士を軽んじ憎み嫉み恨むことは絶対にいけないとおおせである。

アソカ王

—インドにおける「王仏冥合」の先駆者—

仏滅後一〇〇年ほどのあいだは、阿闍世王の外護のもとに、第一回の釈迦の經典が結集されたほかは、付法藏の迦葉・阿難・商那和修・優婆塞多・提多迦によって、順調に、小乗教が弘められてゆき、特筆すべき事柄もなかった。

しかし、一〇〇年ほどしたころに、仏教僧たちの中で、仏教にしたがわず、邪義をとなえるものが出現し、教団内に乱れを生じた。さらに、それよりも、もっと重大なる事件は、同じころ、ギリシヤのアレクサンダー大王のインド侵入を機として、アソカ王により、インド歴史上最初の帝国が建設されたということである。

空前の偉業、

全インド統一される

英雄アキレウスに武運を祈り、軍神アテナの加護を信ずる、アレ

クサンダー大王のひきいるギリシヤ軍は、バビロン、バクトリヤ、イラン等の中近東アジアの諸国を征服し、インダス河を越えて、インドをも席巻しようとした。

ところが、八年半にわたる、あてなき長路の遠征と、熱病とが全軍を苦しめ、後退をよぎなくさせられた。

この機に乗じて、インドからギリシヤの軍事勢力を一そうし、統一国家の基礎を築いたのが、マカドニアウルヤ王朝の青年王、チャンドラグプタであった。六十万の歩兵、三万の騎兵、九千の軍隊そして、多くの戦車（二輪立ての馬車）を駆使して、北インドのほとんど全土を、その支配下においた。

しかし、かれの時代には、まだ国造りがいそがしく在来の宗教である外道のバラモン教を信じており

当時の新興宗教ともいいうべき仏教との縁はむすばれていなかった。

その子、マカドニアウルヤ王朝の二世ピンズシヤラ王も、父の血を受けつぎ、国運を隆盛にみちびき、ギリシヤ、エジプト、シリヤ等の西方諸国との国交をはかった。かれの別名を、アミトラグハ

（敵を殺すもの）と称するのをみてもその豪勇さがしのばれよう。そして、祖父の智と父の豪を継承し、全インド統一という、空前の大偉業をなしたのが、第三世のアソカ王である。

それまでの国交は、インドと、西方世界との、たんなる接触にすぎなかったが、アソカ王は、国内においても、仏教を根幹とした政治を行うとともに、仏教を、国外にも急速に伝播して、インドを、国際的に重要な中心となしたのである。

伝説上のアソカ王

アソカ王については、いろいろと伝えられているが、一般にいわれていることは、伝説的なことで、確実なる史料にもとずいたものではない。

すなわち、アソカ王は、性来頑健狂暴で、父王の寵愛がなく、北インド地方の叛乱軍と矛をまじえ、多くの武功をたてた。しかし、父王の死後、多くの兄弟を殺し、自ら王位につき、反対する女人、諸臣を殺し、惨酷のきわみをつくしたので、「暴悪アソカ王」といわれた、と。

仏法による国家の征服

アソカ王が仏教に帰依した動機は、即位後八年目に、カリンガ地方を征服した時、十万にのぼる捕虜と、同じく多数の大屠殺を行い、その罪を深く悔悟したことによるといわれている。

その後、自責の念に打たれ、戦争を嫌悪し、戦争の抛棄を決意した。勝利の絶頂にありながら、すんで戦争を抛棄したのは、古今東西の歴史を通じて、おそらくアソカ王一人ではあるまいか。

いご、「武力による征服」を断念するとともに、「法による征

服」を決意したのである。

すなわち、人間の平等を説ける仏教を、国是として採用し、仏教にもとずいた自己の政治理念を、実行にうつしていった。こうすることにより、当時、他の諸宗教と同列にあった仏教の地位を高めて、国教的存在にするとともに、国外へも布教して、仏教を世界的宗教たらしめる基礎を築いたのである。

伝道師を派遣した地域は、全インドはもちろん、シリヤ、エジプト、アフリカ、ベルシヤ、ビルマ、マレー等、実に、当時としては、おどろくべきほど広範囲にわたっている。

さらに、かれの思想は、インド大帝国の元首であるとともに、個々の国家を超越した立場に立つて特別な民族意識もなく、自分の行う政治が、仏法にもとずいていることに、絶大なる信頼をよせ、世界の指導者たらんとしたのである。そして、国籍、民族の別なく、世界中の人間が、いかなる時代においても変ることなき、永遠の理法を願ひ、政治とは、人民の利益のために、真に力をつくすことであると考えていた。

この点、アソカ王は、会長戸田先生が高らかに叫ばれた、「王仏

冥合」のご精神を実現した先駆者の一人であるといえよう。

仏教渡来期において、仏教を守護し、その精神を政治にも反映させた、わが国の聖徳太子と、アソカ王を比較してみるに、聖徳太子がいなくても、仏教は、当時の大陸からの絶えざる流れにおされて、いつかはわが国にも伝播される運命にあったのである。しかるに、もし、インドに、アソカ王出現せずんば、仏教は、現在のような世界的位置をしめることは、とうていできなかつたであろう。

アソカ王の信仰活動

アソカ王の信仰活動のうちで顕著なるものは、仏跡を巡礼して、その保護を行ったり、多くの塔や記念碑を建立したりしたこと、一千



アソカ王建立の石柱上部にある獅子王の像

人の僧を集めて第三回の仏典の結集を行ったこと、そしてもう一つ忘れてならぬのは、自己の政治理念を民衆に徹底せしめるため、インド全土に多数の石柱を立て、それに、仏教の平等と慈悲の精神を根本として、民衆の行うべき道をしめした文章をきざんだことである。その文章を「法勅」という。

この「法勅」は、直接には、アソカ王を研究する上において、重要な資料となり、間接には、仏法発展の研究にも貢献する、もっとも確実な資料となっている。

石柱とともに磨崖といつて、自然の岩石を利用して「法勅」をきざんだものもある。また、石柱には、多くその頂上に、獅子・牛・馬などの動物の彫刻をのせてある。その刻文の中に、とくに七種の

經典の名をあげ、僧尼および信徒が、これを学び研究することをのべてあるので、すでに当時、經典が存在していたことがわかる。

池田総務のお話

最後に、このアソカ王について池田総務は、次のように話された。

「アソカ王は、日本の聖徳太子以上に、徹底して、政治と仏法を一致させていったのです。アソカ王というすぐれた人の後にすぐれた仏法があるので、民衆は、信頼しきつてついてゆけたのです。そして、国が栄えたのだ。ちやうど、国を滅してしまった日本の神道とは正反対ですね。全民衆に、仏法を知らせることによって、人間の歩む道というものを、ハッキリと教えてやったのです。広宣流布の暁には、アソカ王の時より、もっと平和な世の中が出現することは絶対に間違いありません」と。

仏教上、三千年に一度、その花を咲かすという憂曇華の花とともにアソカ王は、インドの民衆から、転輪王として尊とばれ、インド建国の王として、今日なお、新興インド共和国の理念として存在し、インドの国とともに、インド国民の心に永久に生きているのだ。

王さまに生れた因縁

高橋殿御返事(一四五七頁)

付法藏経と申す経にはいさご餅のちあみを仏に供養しまいらせしむらば百年と申せしに一閻浮提の四分が一の王となる所謂阿育王これなり。

上野殿御返事(一五四四頁)
此の大王(アソカ王)の過去をたづぬれば仏の在世に徳勝童子、無勝童子とて二人のを幼なき人あり、土の餅を仏に供養し給いて一百年の内に大王と生れたり。

このほか、「羅尼御前御返事」「新池殿御消息」にも、アソカ王が、仏滅後百年ごろに出現した因縁について説かれている。これは「付法藏経」「阿育王経」「大智度論」等に説かれているものである。

その概略は、釈尊が弟子をと

もなつて王舎城で乞食の修行を行なつてゐる時、釈尊の通る大路で、二人の子供が砂遊びをしていて、そのうちの一人が、手で砂をささげ、釈尊の鉢に盛つた。それを見た釈尊が、「この子は私の滅後百年にして現われ

アソカ王となる。また、正法を信じ、転輪王となり、八万四千の塔を立てて舍利を供養する」とのべたことに由来している。御書に説かれている意味は、真心のこもつた供養が大切であり、その功德の絶大なることをのべておられるのである。

仏滅後何年に出現したか

アソカ王が、仏滅後何年に出現したかということについては、二つの説がある。

ある人は百年であるとし、ある人は二百年としている。後者は、二百年ぐらゐのへだたりがないと、インド歴代の王であるアジャータサットからチャンドラグプタにいたるまでの在位期間を、いれる余地がなくなると主張し、前者は、そんなにへだたりがあつたのでは、特別に強力な組織を持たぬ当時の教団が、どう変貌したかわからぬと主張している。

二百年という記録は、当時、現在のような層で一年を数えていたのではなく、当時のインドの宗教行事から一年を二年に数えていたためで、われわれは、大聖人の仰せのように、仏滅後百年と覚えておけばよい。

禅寺に入門して

—教義なき禅宗—



大賀康弘

力をもとめて入門

人と金と機械と電波の渦まく、この騒然たる世相を、いかにのりきるか、その力をもとめてわたくしは、東京谷中にある禅寺の門をたたいたのであった。

日曜坐禅会と称して、夕刻から随時に来て、だまって坐禅すること二時間、あとは茶話会や、本山から来た老師が講話するていどで、およそ修行とは縁の遠いものであった。

この老師は、臨済宗の長老であり、一日として胃腸薬をはなしたことがない。また、自分の守り本尊は、アマダでも地藏さんでも何でも良い、経文の選択も自由だ、と

らだが固くなってしまふ。イネムリが出てくると、警策という棒で、背中を二十回下ヤされるが、音のわりには痛くない。そのつど、お札の意味から手を合わせる。

夜明けとともに朝飯、それも、麦の多い、オカユにタクアン二枚で、音をたてずに、早く食べ終らなければならぬ。行動は、すべて抽子木で命令される。まるで、むかしの軍隊生活みたいだ。

教義なき禅宗

食事したり、老師のへやをたずねて、問答を行なうのだが、何をいつているのか、チンブンカンブンでさっぱりわからない。

老師から「隻手無妙の声を聞け」と問題が出され、これにたいして自分の回答をのべるのだが、第一、問題の意味がわからないのだから、答えようがない。問いかえすと「片手の声なき声を聞け」というので、ますますわからない。一刻たつて、また老師の前で返答しなければならぬ。何もわからないという「喝」を「喝」と、われ鐘のような気合いをいれられて終る。

まるで、鳩がマメ鉄砲を食ったような心持ちで、退散したのである。

禅の問答は、二千あまりもあるようだが、系統づけられた教義は一つとしてなく、全部自分の体験と直感からわり出して解答をつくるのだから、我見の塊りである。これで、頭が変にならなかつたらどうかしている。事実、その老師も、青年僧時代恐怖症にかかり、境内の松の木が恐ろしかった、と告白している。

禅宗の大学者として知られる鈴木大拙の「正法眼蔵」にしても、朝日奈宗源の書いた「臨済録」にしても、われわれの知識では、読んでも、何をいわんとして読めるのかさっぱりわからない。いかに禅宗というものが、一人よがりですべて適当性がないかがわかる。

恐ろしき害毒

ジェット機が、マッハ以上で飛びかき、ロケットは、月を訪問して帰るといふ世相に、耳目をふさいで、超然として「動中静あり」とかいつて、フンゾリかえっている姿は、正直に、堂々と世の荒波に立ち向っていく意欲もなく、その姿は、手も足も出ないオモチャのダルマになつて、コッケイというほかはない。

ら、この風変りな宗教「禅」に興味はもつたろうが、その理論は、宙にういており、哲学的な深い思索もなく、ただ「だまって座ればピタリと悟る」というような、低級な教義は、理解も信ずることもできずに、一時的な流行に終ると思う。

禅宗にこつた人は、大聖人さまの「四箇の格言」のとおり、天魔の所為により、奇人が多く、その末路はあわれである。

わたくしの働いている会社の会長も、禅宗の檀家総代として、天魔に奉仕したために、関西財界の巨星といわれた名声も、年とともにうすれた。頑固者とよばれてワシマンぶりを発揮し、従業員の反感をかき、ついに、神経痛で倒れて、社会から消えていった。これを考えても、いかに、富や名声があるうとも、邪宗教に縁すれば不幸になることを痛感する。

ようやく正法にめぐりあえて、わずか一年あまりの間に、慢性胃腸炎、腎臓結核が全快するといふ、大御本尊様の功德にくらべて、七年間の暗い邪宗生活が、ざんねんで、邪宗の坊主の姿を見ると、ムラムラと怒りがこみ上げてくる今日このごろである。

(男手第十四部隊、関西学生部員)

思想なき文学に思う

——混乱した社会の反映か——



最近の小説を読んで

今年前半期に文学賞を受けた作品を読んでみた。いわゆる新人の作だが、一応世間から期待され、また、それにこたえてゆけるであろうとされた人々の作品だ。

これらの小説を読み終えて、賞を受けた作品に、ケチをつけるわけではないが、わたくしは、決して満ちた感じはしなかった。そして、心のどこにも、「ここ」

といって、共感(きかん)をよぶところもなかった。何かがかけている。確かに、受賞作なのだからリッパなのであろう。けれど、どうしても、「ああ良い作品だな」という感慨(かんがい)がわいてこない。

考えてみれば、これは、新人だからという問題だけではないようだ。いま、世間にあふれている作品も、みなにたりよったりで

稲葉慶子

はないだろうか。

現在は、文学史上からみたら、おそらく散文、とくに、小説の氾濫(はんらん)時代といえるだろう。単行本として出されるほか、雑誌に、新聞に、長・短編とりまぜて、次から次へと、目まぐるしいまでに、いろいろ発表されている。大家とよばれる人から、かけ出し作家にいたるまで、実に多い。その数は、想像(そうぞう)をこえるものに達しない。

読んでいて、シャクにさわってくるようなものもあれば、さぞかし、もうそうとうのお年と思われ人の作品にも、よくもこんなものを公衆の面前に発表して、恥かしくないものだと、おどろかされるものもある。こんなにダラダラと、一体何をいおうとしているのか、まったく理解に苦しむものもある。それからまた、どうして、それがその作品に必要であり、またどんな効果があるのかわかりかね

るように、セックスの問題がとりあつかわれ、文学作品というにはあまりにひどすぎるものの何と多いことか。

読み終って、「これこそ、わたしが望んでいたものなのだ」と、心から満足し、そして、勇気があふれてくるような、また、いつまでも胸の奥にのこっているような、そんな作品が、ほとんどない。そればかりではない。かえって、読者をして絶望感(ぜつぼうかん)におとしつけ、ますます孤独感(ごどくかん)におとしつけ、何が何だかわからない混乱(こんらん)にひきずりこみ、はたまた、善悪の判断さえ危うくさせるものがあるではないか。

文学と思想

それもこれも、作家自身に、しっかり身についた思想がないからなのだ。

わたくしは、高校の一、二年のころ、二、三の新聞小説を読んでいて、どれもこれも、みな同じではないかしらと、首をひねったことがある。大がいのそれが、ある男とある女が登場して、二人がいかにして結ばれるか、あるいは、別れていくか。これだけの話をひねくりまわしているだけではない

か、何ておもしろくないんだろう、と思ったことをおぼえてい。何ごとも、その根本となる思想がなければ、あるいは、それがアヤフヤなものだったら、満足しえるものではない。

現代の日本文学には、思想がないということは、すでに、指摘されているところである。

確かに、キリスト教という一つの思想をバックにもつ文学や、マルクス主義という大きな思想にたぬかれていく文学は、その思想がどういうものであるかはさておき、一おうは、読みごたえがあるに違いない。ところが、日本の作家には、大きく生活をも支配している思想がない。だから、作られる作品も、実の小さい、内容のつまらないものになってしまうのだ。

なかには、そうとう理屈っぽいものがある。くりかえし読んでも、わからないものがある。はたして、書いている本人が、ハッキリわかっているのだろうか、いらぬ心配までしてしまう。とにかく、根底に何もなくて、理屈をのべてみても、それは空論にすぎない。

新しい文学出でよ

読書は、心のカテだの、人間形

成の一助といわれているのを考えれば、もっと責任感のある、もっと豊かな、もっと生き生きしたものが欲しい。今日、氾濫(はんらん)している作品のどれだけが、後世でも読みつたえられてゆくかは、想像にかたかないものである。また、今日まで古典として人間の歴史とともに歩んできた作品があるにしても、やはり、現代の人が読んで、すぐわかる現代文学に、もっともっと期待したいと思うのは、わたくし一人であろうか。

作家が、すべてのものの根本となる、確かな思想をもち、作品が、その思想によって貫かれていけるならば、どんな題材をとっても、自由な水々しいものが生まれ、読む人に潤いと、向上しよう、進んでいこうという意欲(いきよく)を、かならずいだせると思うのだが……。

正しい仏法を根本の思想とし、三大秘法の御本尊様を信じて、作家自身の人間革命がなされるならば、読者に共感と勇気を与える作品が、おのずと生れてこよう。

最高の生命哲学を根底とした新しい文学出でよ。

いや、広布問に近い、かならずや、現われることを信じよう。

(女子学生書記)

自己の革命から

家庭の革命へ

本 杉 清

おそるべき業病「脱疽」という病名をあたえられ、地獄さながらの苦痛を味わっていたわたくしは将来を決する運命の岐路に、立たされたのである。

療法ばらいをし、無条件に入信してから二か月あまり、五座、三

読者のみなさんのページとして論文・随筆・体験・感想・質問など広布に対する建設的なものを、多くのせてゆきます。



座の勤行をキチツとやった。

このわずかな期間に、いろいろの功德があらわれてきた。病状の悪化はとまり、快方に向い、あとは、時間の問題だけとなった。

しかし、ここでのべたいことはわたくし自身の業病の回復という大功徳よりも、自己革命につながり、家庭革命の一つの記録なのである——

ある日、小学校五年生になるわたくしの子供が「これ、先生がよこした」と、毛筆で書いた一通の手紙を、わたくしに渡した。わたくしは、またいつもの学校からの連絡かと思いつながら、上半身を起こし、開封すると、担任の先生からわたくし宛のもので、つぎのように書かれていた。

「足を悪くされたそうで、ご不便のこととぞんじます。お子さんの作文を見て、ホロリとさせられました。——どんなに貧乏になろうが、乞食になろうが、おとうさんの足がなおつたら、それが、一番うれい、御本尊様、早くおとうさんの足をなおしてください——と、書いてありました。ホントウに、良いお子さんをもたれて幸せです。一日も早く、なおりますように」と。

わたくしは、読みながら、涙がホホをつたわり、とめどなく流れおちた。そして、読み終って、さらに、うれし泣きに泣いた。と同時に、御本尊様に、心から感謝した。



入信してからのわたくしは、自己の生命力がまし、慈悲の心さえも、もてるようになり、自らの変化を感じるようになった。

入信以前のわたくしであったらどうであろうか。心のアセリや自己本意のわがままがあらわれ、人の善意も、ころよしとはしなかつたであろう。しかし、いまは痛み、苦しみの中にも、とにかく成仏するのだという、最高の目的を欲求することができる姿に、変わったのである。

この自己革命が、当然、自分の

周囲にも、変化をもたらした。ほかの子どもたちも、以前にもましておとなしく、すなおになり、いつけどおりに手伝いをと、親に心配をかけないように、という気持が、強く行動にあらわれてきたのである。

一家の戸主として、父として、あらゆることを、御本尊様を中心にした時、一家は一変し、和薬の上に、なお、温かさをまし、明るい家庭になるのだと、しみじみと感じている。

(江東支部 城北地区)

筆 抽せん券

随 芦田信子

「ご愛用感謝サービス抽せん券——一百万円があたる」、ひさしぶりで休暇をえて、わたくしは、タンスの整理をしていた。

「オヤオヤ、五枚も……」いつの間におとうさんは、こんなに宝クジを買ったのだらう、と思ひながら、よくその券をみると、「白米株式会社」とある。「ハハ、サテハ……」と、わたくしは、急いで、台所の麦の入った袋を見ると、抽せん券についていると同じ

人形じるしのマークがあった。御本尊様のおかげで、わが家もヤット一升買いの生活から脱して米屋は、ジャンジャン持つてくるようになった。

「ご飯ぐらい、白いのを食べてもゼイタクではなかるう」といい出したのも、主人で、いつしか、わが家の食卓からは、妻は影をひそめたのである。

それが、つい二、三か月前「オイ、あまり白いご飯ばかり食べていると、カツケになるそうだ。ヤツパリ、麦はチヨット入れたほうがよさそうだ」といい出して、ふたたび、妻は、食卓にのせられるようになったのである。

まだまだ、すべての面において御本尊さまの功德を受けきったとはいえない。

しかし、わたくしたちは、たとえどんな生活の中にあつても、あすの幸福を信じ、あすの希望にもえている。

だが、過去のわたくしは、あきらめの觀念の上に立った、女のたしなみと意地が、他人にはボロをみせまいと、カラクもささえてきた家庭の平和、「あなたは、それでもホントウに幸福だとおっしゃるの……」と、だれかからやさしく聞かれたら、ワツと泣き出した



「東京都新宿区信濃町三二一〇七
聖教新聞社内、大白蓮華編集部」
あてに、どしどし御投稿くださ
るよう、お願いします。

いような思いになる、そんな幸福
であった、いまにして思えば。
けれども、いまは違う。過去遠
慮の罪は滅し、行く手に、なお
ふまなければならぬ宿命の、イバ
ラの道はあれども、御本尊様に守
られてとおる時は、すべて転重懸
受され、その果に、うらぎられる
ことのない、永遠の幸福の光がさ
んさんとふりそそいでいるのだ。
御本尊様におあひしてからのわ
たくしは、長い長い旅路の果に、母
のフトコロに帰った幼な兒のよう
に、心のやわらぎをえた。さりげ

想 友 情

ない日々に、つくるわぬ、ホント
ウの幸せを感じている心を、わた
くしは、寶石のようにいとおしん
でいる……
わたくしは、イタズラツ子のよ
うに、ニヤニヤしながら、夕食の
米をとぐ中に、一パイの妻を入れ
た。
ホーム・ソングを口ずさみなが
ら、とぐ手も、軽やかだった。

(梅田支部 梅田地区)

松尾安子

「友が悲しいにわれは泣き、わが喜
びに友は舞う」という歌の文句は
あるが、わたくしが悲しんでいる
時、苦しんでいる時に、同情して
なぐさめてくれる人は、多くいた
が、わたくしの喜びを、ともに喜
んでくれる友人を、わたくしは持
たなかった。
ある友人は、わたくしにこうい
ったことがある。「あなたの暗い
さびしいところが好き」と。とこ
ろが、わたくしが、御本尊様を受
持し、暗さと、さびしさとが、わ
たくしからうすれていった時、そ
の人はこういった。「完全、円満

な人に魅力はない」と。
その言葉を、わたくしは、残酷
なものに感じた。御本尊様にめぐ
りあえて、たとえようもなく幸せ
になったわたくしは、信心してい
ないその友人にとつて、ただ失望
でしかなかったのである。

しかし、省りみれば、むかしの
わたくしも、幸福な人がきらいで
あった。自分よりも不幸な人をみ
た時にのみ、なぐさめを感じ、魅
力を感じていた。そういう人が、
一転して幸福になると、なにかう
らぎられた感じがした。

それは、自分自身が、不幸だっ
たからである。

いま、刮目して世間をみれば、
人々は、ことごとくこの傾向を持
っているようである。とくに、女
の人に、この傾向が強いようだ。
この二年間の信心でえたわたく
しの確信は、この御本尊様を拜ま
ない人には真実の幸福がありえな
い、ということである。

数人いたわたしの友人の中の一
人は、二年間にわたる猛反対の後
今年の八月、ようやく入信した。
反対期間中は、なんてわからずや
だらう、と思つたこともあつたが
入信後の信心ぶりは、目ざましく
次々とわき出する功德を、その人
は、逐一わたくしの所へ、報告し

てくれた。
その人の喜びを、わたくしも、
心から喜び、その人も、わたくし
が功德をえた時は、一番喜んでく
れる。わたくしは、はじめて、悲
しみだけではなく、喜びとともに
わけあうことのできる友人をえた
のである。

信心しなかつたら、一生涯かか
つてもうることのできなかつたで
あるう友情を、はじめてうること
ができたのだ。そしてまた、人の
喜びを、心から喜び、人の幸福を
心から願うことのできる自分とな
つていたのである。

広宣流布という同じ願いに生き
るわたくしたちならば、ただ一人
の友人だけでなく、学会の同志全
部が、喜びも悲しみもともにする
真の友情にむすばれてほしいと、
しみじみ感ずるものである。

(女子第三十二部隊)

想 東洋広布は

われらの使命

栗坂嘉須宏

最近、同志のAさんと折伏に行
つて、強く感じたことがあつた。
先方のHさんは、もと念仏の坊

主、しかし現在は、無信心者だと
いつている。こんどで、三回目の
訪問である。

話は、世間話からはじまって、
Aさん、Hさんの軍隊時代のこと
に花が咲いた。わたくしは、軍隊
生活の経験がないので、聞き手に
まわる、心の中では、お題目をと
なえ、なんとしても、Hさんを救
つてやりたい、と思ひながら。

二人の話はどこまでも続く。
「……満州では土匪、中国では八
路軍の中に、旧日本軍人が、多数
志願して入つて行つた。一衛生中
尉が、八路軍では軍医中佐に、ま
た、一兵長が、准尉で待遇されて
いる。わたくしも、よかつたら来
ないかと、上官から勧誘された」
このような話を聞いた時、わ
たくしは、ジツトと考えこんでし
まった。終戦直後、祖国日本を顧
りみなかったこれらの人々が、現
在、どのような心情でいるであろ
うか。日本にいる家族のことに、
思いをよせていないであろうか。

また、自分の意志だけではなく、強
制的に帰国をとめられた幾多の人
人は、満州、中国だけにかぎらず
全東洋にわたつていっているのでは
ないであろうか、と。
異郷の空で、さびしく、祖国の
地に思いをはせているこれら同胞

の人々は、三大秘法の御本尊様が東洋に流布されていった時こそ、はじめて、真の幸せをうることができるのだ。

日本はもちろん、東洋の広布こそ、日蓮大聖人さまのご命令である。アジアは、われらを待っているのだ！

それには、まず、足もとからかためよう。自分が信じる道は幸福をうる方法は、主師親三徳具備の御本尊様以外には、絶対にないのだときめ、信行学にはげんていこう。

Hさんは、かならず折伏する。そして、やがてせまっている東洋広布に役だつ人材を、どんどん折伏してゆくのだ。

(熊本支部 玉名地区)

想 総本山に登山して

岸田臣吾

わたくしは、さる十二月十三日に、日帰りで、総本山へ登山させていただきます。

名勝富士山を背景に、近代的建物の中に神秘さを漂よわせている姿は、まったく荘厳なものでした。わたくしは、はじめて見る大

自然の神秘に驚歎し、この大石寺が、一日も早く、世界の大石寺になるように望みました。

以上のごときは、総本山へ着いて、最初に感じたことですが、次に感じたことは、登山に来ている人々のうち、年配の人よりも、若い人の方が、圧倒的に多かったことです。しかも、その一人一人が、真剣な態度で御本尊様を信じきっていたことです。



わたくしは、入信してまだ半年あまりですが、入信してから三月目ごろに、「現代親子論」と題して、時代評論的な随想を書きました。

日本には、むかしから、日本独特の欠点があります。それは、姑と嫁との関係です。姑は嫁の悪口をいい、嫁は姑の悪口を

話す。これは、どこまでいっても、いつまでたっても同じです。

わたくしは、この問題が解消しない限り、日本は、絶対に内面的に進歩することはできないと思います。

では、この問題を解消するものは何か。

わたくしは、その時、それは、「デモクラシー」いわゆる民主主義しかない、民主主義論を説きました。しかし、いまから考えると、それはダメです。なぜならば、現在の民主主義のあり方、その根本に、反省し、改善すべき点が大いにあるからです。

では、その問題を、完全に解消するものは何か。それは、ここでわたくしがのべるまでもなく、創価学会であり、三大秘法の御本尊様を信ずることでありました。

わたくしは、総本山へ登山した時、つくづくそう思いました。

そして、次代にならう青年部が、団結がたく、真剣な態度で御本尊様を信じ、真剣な態度で、広宣流布めざして活躍している姿を見て、将来日本は、いや日本だけでなく、全世界の国々が、平和な、楽しい国になることを、一そう強く信ずることができました。

(名古屋支部 一宮西地区)

想 あやまった

宗教観

水野重明

人間の世界は苦の境界だと、むかしから聞かされてきた。

思うこと一つかなえばまた二つ、三つ四つ幾時も難かしの世や、まったく、上は王侯貴族から、下は一般庶民にいたるまで、生きとし生けるもの、人間は、なまじ高等動物としての豊かな感情をあたえられているために、なんらかの意味で、悩みや苦しみを持たないものはない、といつても過言ではないであらう。

バカか、キチガイならいざ知らず、普通の人間なら、もろもろの欲望をいだき、そのもとめてえられぬ焦燥に、悩み、苦しみ、もしそれが、必死の努力によって、やっと欲望をとげたとしても、その時には、すでに、さらに、いま一段と上の段階への願望、欲求が頭をもたげているのである。どこまでいっても、「わがごと成れり」と決して満足することを知らぬおろかなるその心は、まさに、無間地獄さながらの姿であり、餓えた狼が、餌をあさる、みにくい

餓鬼の姿ではないか。

釈迦は、その人間の苦悩を救う方法として、煩惱を断じ、もろもろの著を離れしむ、すなわち、一切の欲をすてよ、と説かれたとか。しかし、末法の今日、われわれが、すべての欲望をすてさつたらば、一体、どういふことになるだろうか。おそらく、生存すること自体が不可能であらう。

所詮、人間生活は、苦難の道ではあれ、そのつらい、苦しい、けわしい道を、努力によって切り開いて行くことによつてこそ、個人はもちろん、人間社会の幸福も、進歩も、向上もあるのだ——と常々わたくしは、このように思つていままです暮してきたのである。

このような、単純な処世観につわたくしの常識では、仏とか、神とか、いわゆる信仰などというものは、笑止千万な愚人のたわ言として、歯牙にもかけず、ぜんぜんそんな話には、いまままで、耳をかそうともしなかつたのである。

だから、三千年のむかし、未開の無智妄迷な当時の衆生を濟度したという釈迦仏法を、原水爆時代のわれわれにおしつけようとする、現代の世にいう宗教家や、坊主の言動は、ちよろど、大人に向つて、桃太郎やカチカチ山のお伽

解を聞かすようなものであった。

そんなわたくしが、ついに人間の力の限界に気づき、おそまきながら、末法のご本仏、三大秘法の南無妙法蓮華経という大御本尊様におあいできたのは、人生に、すべて希望をうしなない、旅の空でコジキの一步手前まで転落していた時のことである。

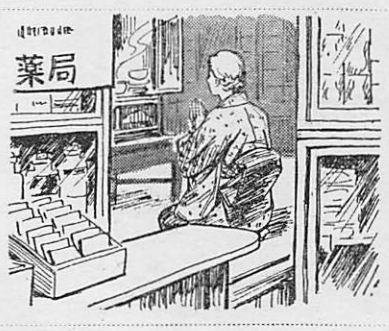
いらい、三年半余にわたる、牛の歩みにもた、弱々しいわたくしの信心ではあるが、入信当時の暗い、みじめだった家庭生活と、現在の明るい生活環境は、まさに天地雲泥の相違である。

わたくしのように、さんざん悩み、苦しみ、悪あがきのすえ、どん底まで落ちこんだあげく、やっと逆縁により、御本尊さまにおあいできたような人間は、前世の罪業も深く、今生においても、罪障浅からぬ身と思う。生やさしい信心では、座談会などで聞かされるような、花々しい目のさめるような、大功徳は、期待しうべきもないと思っているが、三年半余の信心の冥益で、やっと人並な生活水準に、物心両面とも浮び上ることができたことは、なにものにもまさる喜びである。

(広島支部 府中地区)

体 験 クスリ屋でも なおらぬ病氣

田中さか江



この世の中には、神も仏もあるものかと、いつも、信心に夢中になっているものを、笑ってみておりました。というのは、義母が、医者にもなおらぬひどい持病持ちで、いろいろと信仰していました

が、なおるどころか、かえって、悪化し、ついには、頭がおかしくなつて、死んで行ったからです。その後、新入の入会方法だ、という主人の反対をおしきつて、わたくしは、入信したのです。

ところが、主人は、神フダが悪いなんて理解できぬと、全部焼い

たといながら、二まいだけのこしていたのです。すると、入信いらい、毎日品物がなくなるようになり、二週間目ぐらには、お金も紛失してしまいました。そこでやっと主人は、しまつておいた神フダを焼きました。

それから四か月ぐらいたつて、フト、わたくしが、十二年間も苦しんでいたアレルギー性尋麻疹が、ほとんど出ないことに気がつき、おどろきました。わたくしの家の商売が、クスリ屋なので、いろいろ、クスリ、注射と、手をつくしましたが、なおらずに、半分あきらめていただけに、そのおどろきも大きかったです。

末の子は、先天性心臓病、わたくしも、また、ゼンソク、胃病持ち、とにかく、御本尊様のお力によつて、すべてをなおすのだと、一生けんめいにやってきました。

そして、四年半、いまでは、子どももわたくしも、すっかり元氣になり、近所の人からは、クスリ屋のおくさんは、前のおくさんと違う人だろう、といわれるほどにまでも変りました。

この上は、長男が、中学生、高校生となり、早く青年部員になり、信心面でも、社会面でも、リ

ツバな人材となつて、広布のお役にたつてくれるようにと、願うのみでございます。

おのが身は広布の蔭に咲ぬれど
我男は広布の鐘ぞならさん
(大田支部 奥沢班)

想 感 結核療養生活の中で

田中幸雄

今日もまた、新しい患者がはいつて来た。不安におびえ、恐怖とさびしさに、人生の無常を、セイパイ表現しているような青い顔なにくつたえるすべなく、あきらめと絶望にうちひしがれたあわれな姿。

かつて自分も、そうした姿のままに、ここに来たので、苦しさに加え、家族のものには、できるだけ元氣にふるまい、笑顔をみせ、安心させてやることに、かすかな喜びを感じただけであったのだ。

一年前、常在寺でご授戒をうけたまま、退転状態を続けていたのだ。その結果、どん底におち、どうにもならなくなつて、やっと戸田先生のおことばを信じる氣になつてみようと決心し、斗争をはじめ

たのである。その結果は、キチツとあらわれた。大御本尊様より数々の功徳をうけ、空虚を感じる病院生活も、絶対になおるんだ、という確信のもとに、楽しいものと変つていく。

信心がぐらついた時、いつもはげましてくれた同志の人々を思い、自分も、新しい自覚に立つ覚悟をした。日蓮大聖人さまの仏法の根本である、永遠の生命について教えられた時、それは、はるかな、遠いものではあったが、寂光土の輝きがマブタにうかび、あこがれをおぼえ、死の恐怖やおろかな煩惱も消え、なにか清らかな心になり、いしれぬ喜びを感じた。

学会員であるわたくしが、病を苦とせずいられることは、信心をしてお陰であるど、つくづくと、身の福運を感じざるをえない。御本尊様は、このように功徳があるのだ、創価学会こそ正しい宗教団体なのだ、このわたくしの姿をみてくだささい、と、声を大にして叫べるよう、一日も早く全快して退院できるように、信行学にはげむ決意です。

(男子第三部隊)



小説

日蓮大聖人

—佐渡流罪の巻—(二十二)

湊 邦 三

山口将吉郎画

(一)

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

その日……文永九年二月十日の申刻(午後四時)頃に、伊豆國の江間郷を後にして、天城の山中から流出てある狩野川を渡り、昨日の雪が残つて斑に見えるてある下田街道を疾風のやうな迅さで北上して行きながら、五字、七字の題目を必死に唱へつづけてある武士があつた。

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

武士は侍烏帽子の下の顔が青醒めてゐたが、眉毛の根にも兩眼にも精悍さが漲つてをり、扇面を白く抜いて散らした模様のある紺地の直垂で包んである肩の幅がひろく、胸板があつく、指貫をはいてゐる腰も太く、鍛上げた體格をしてゐる。

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

その武士は腰刀の他に、長い太刀を腰に横たへてゐて、柄頭を左手で握つてをり、夜道の用意か、松明を右手に持つて駆けてゐる。

狩野川を渡つて下田街道を一里ばかり北上した頃、西北の空に聳えてゐる雪

の富士山が、沈む夕陽を受けて、湯上りの處女の肌を見るよう血色を含んだ美しい薔薇色に染つて、旅人を立止らせてみたが、武士の精悍さを漲らせてゐる兩眼は、雪をかぶつてゐる箱根山を眞直に睨んでゐて、脇眼を振らなかつた。

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

この武士は、去年の九月十二日の夜、法華經の行者日蓮を斬らうとして幕府が馬へ載せて刑場の龍の口へ曳いて行つた時、馬の轡に取付いて、師と共に死ぬ覺悟であつた日蓮の弟子、名越家の江間越後入道光時とその子四郎親時に、父中務頼基の代から仕へてゐる四條中務三郎左衛門尉頼基であつた。

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

四條頼基が題目を唱へて必死に駈けてゐるのは、今夜の内に、相模國の鎌倉へ駈付ける覺悟でゐるからであつた。

彼が松明を手にしてゐるのは、險しい箱根の山中で夜を迎へる用意、火打鎌や火打石や火口などの入つてゐる火打袋が、烈しく腰で揺れてゐる。

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

頼基は疾風のやうに駈けながら、唱へつづけてゐる題目を止めない。

彼は主家江間家の安泰を法華經に祈つてをり、老いたる主人の入道光時や、若い主人の四郎親時などに災ひが及ばないやうに、全身全靈を傾けて念じつづけてゐるのだつた。

日蓮聖人の辻説法に耳を傾けてゐて心動き、法華經に歸依して、弟子の列に加へてもらつた頼基が、師の日蓮に導かれ教へられていよいよ強くした信念は、大白法法華經の御爲に生命を捧げる淳信は、主に對する忠、親に對する孝師に對する恭敬に通じて、いささかも忤らないといふことであつた。

法華經を熱烈に信仰してゐる者が、主に不忠であることがなく、親に不孝で

あることがなく、師恩を輕んじ背くことはあり得ない。

寛元四年といへば、文永九年からは二十六年も前のことになるが、頼基の老いたる主人江間越後入道光時が、前將軍藤原頼經と謀つて、北條時頼を執權職から逐はうとしたことがあつた。

その時、陰謀が露はれて、光時は薙髮して罪を謝し、一命は助けられたが、領地の越後國は没收されて、伊豆國の江間郷へ流された。

家臣の多くは主家を見限り、主家を見捨てたが、頼基の父中務頼基の忠心は微動もせず、鎌倉から逐はれた入道光時を慰め勞つて、江間郷へ移つてきたのだつた。

その父頼基の血が、頼基の身體を脈々と流れてゐるらしい。

二十六年間も、冷やかな世間の眼を浴びてきてゐる主家に對して、法華經を奉じて生命を捧げてゐる……その烈々たる信仰のやうに、彼は微塵も混り氣のない忠節を盡してゐるのだつた。

(11)

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

四條頼基は疾風の迅さで歩いて、旅人を驚かせながら、伊豆國の國府三島に一里ばかりの間宮に近いところで、下田街道に袂れた。

足柄路より峻しい箱根山を越へるには、國府三島の東にある河原谷から辿りはじめ、平地の野七里、山へかかつて山七里、嶺傳ひになつて嶺七里……と古く呼ばれてゐる道（古くは六町を一里に計つた）を三里半ほど登つて、蘆の海の邊へ出るのが、彼は相模國の鎌倉と伊豆國の江間郷とを絶えず往復してゐるので、近道を知つてゐる。



冬枯れて褐色になつてゐる箱根連山が、昨日の雪を被つてゐるのを眉毛の邊に望みながら下田街道に挟れると、道を東北に取つて大土肥へ出て行き、來光川に沿つて大竹へ、それから箱根山の南面にある溪谷の部落桑原へ向つて行つた。

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

四條頼基が題目を唱へながら大地を蹴つてゐる脚は、鐵のやうな強さであり、紺地の直垂で包んでゐる胸の亂れを見せない息遣ひは、獸のやうに逞しい。

彼は見る／＼内に、溪谷の部落桑原を通り過ぎて、傾斜の急な箱根山の雪の肌を猿のやうな身軽さで登りはじめ、しばらくすると、山里の内の笹原へ出て、息も繼がずに、山中へ向つて行つた。

時刻は、酉刻(午後六時)に近く、遮ぎる物のない山道も黄昏れはじめ、吹下してくる風は氷のやう、頼基の汗ばんでゐた肌が慄立ちはじめた。

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

主家江間家の安泰を祈つて、題目を唱へつづけてゐる頼基の兩眼は、濃い淺葱色に暮れて行く空へ向けられてゐるが、その眼には鏡兜で身を固めた武者たちの殺氣立つた姿が見えてきたり、太刀や薙刀や槍などの煌きや、眞紅の血飛沫が見えてきたりする。

そして、氷のやうな風に吹かれて赤くなつてゐる耳に、わ——ッ!! と閃光が聞えてきたり、凄じい怒號や悲鳴なども聞えてきたりして、彼は直垂で包んでゐる身體を震はせると、一層、脚の運びを速くする。

『戯者ッ！』

一刻ほど前に、四條頼基は拳を固めて、阿曾沼次郎の横面を打つた。『それほどの大事を、なにゆゑに、急ぎいはぬのぢや！』

阿曾沼次郎が不意を喰つて跟めくと、頼基は飛びかかつて行つて、胸倉へ手をかけ、腰車にかけて庭土の上へ投げ飛ばした。

「昨日の内に、江間郷へ辿着けるのに、酒匂の宿で遊女を相手に、現を抜かしてをつたのであらう！痴者とは、おのれのことぞ！」

純情一圖なだけに、他を責めることも烈しい、頼基は庭土の上へ倒れてゐる次郎へ怒罵を浴せて、邸の奥へ駈込んで行き、老いたる主人の入道光時に、相模國の鎌倉で惹起らうとしてゐる一大事の概略を告げると、玄關へ飛出してきて、そのまゝ草鞋をはいたのだつた。

今、鎌倉の塔の辻の邸にゐる若い主人四郎親時の側近にゐる若い武士たちの内の、阿曾沼次郎は伊豆國の江間郷から西へ、峠一ツ越へたところの駿河國獅子濱の出身なので、両親の機嫌を伺ひに、二、三日、暇をもらつて歸つてきたのであつた。

昨夜は酒匂の宿へ泊り、今朝、箱根を越へてきたといつて、江間家の門を潜つたのは未刻（午後一時）頃であつたらう。

邸の玄關で草鞋を脱ぎ、奥へ入つて、老いたる入道光時に挨拶し、四郎親時の消息も傳へ、それから江間家の重臣である四條頼基に玄關先で會つて挨拶したのであつたが、その時、なに氣なくした立話が、頼基を激怒させたのであつた。

「近頃、四郎親時さまへ、謀叛の誘ひがあるらしいと、朋輩の者が申してをりました。なにゆゑの謀叛なのか、それは判りませんが、同じ塔の辻に邸を持つておゐるの名越家の一族で、評定衆の筆頭、中務大輔教時さまの側近の武士が、夜陰、裏門から訪ねてきてゐる様子、いや、この次郎も、幾度か、取次いだことがあります。しかし、若殿は、笑つて撥付けておゐるになりますか……」

……」

頼基の顔から勞らひの微笑が消え、刻々に表情が凍つて行くのに、阿曾沼次郎が氣付かずゐるのは、若さからであつたらうか。

名越家の一族、中務大輔教時の側近の武士が、夜陰、裏門から……次郎がさういつてゐる頃、頼基の顔は青褪めてしまつてをり、眉毛は險しく額へ匂ねがり、兩眼には突刺すやうな烈しい光が浮んでゐて、無意識に、拳が固められてゐたのであつた。

（またしても、謀叛などと、主家の恐い破滅がくる！）

忠義な頼基が紺地の直垂で包んでゐる胸を殺される想ひになつた刹那、固めた拳が飛んだのであつた。

入道光時が石で逐はれてゐる人のやう惨めな姿で、伊豆國の江間郷へ流されてきた時、父の頼員は健在で、頼基は十五歳の若い武士であつた。

前將軍藤原頼經が、まだ將軍職にゐた頃に、將軍とは名ばかり、北條幕府の飾り首と嘆くのに、越後守光時は人間らしい同情を寄せて、三代の執權北條泰時の弟であつた名越朝時の長子であり、北條一門に重きをなしてゐる身の名利を忘れたばかりに、時の評定衆後藤基綱や藤原爲佐、平秀胤、三善康持などの陰謀に、いつの間にか引込まれてしまつてをり、髪を剃り、領地を失ひ、家臣には見捨てられ、棲み馴れた鎌倉を後にして、伊豆國へ流されてきた時の傷しい姿が、頼基の兩眼には、十五歳の時から灼付いてゐるのだつた。

(三)

『南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！』

題目を唱へて、主家の安泰を祈りつつげながら、險しい箱根山へ登つて行く

頼基は、一刻も早く、相模國の鎌倉へ迫り、若き主人の親時から詳しく事情を聞き、執權北條相模守時宗を取巻いてゐる御内方者の動きやら、幕府の氣配などを探つて、災ひが、主家に及ばないやうに取計ふつもりであるのだつた。

(宗家を必死に護つてゐる御内方者が、夜陰に、塔の辻の邸の裏門から入つてくる……教時さまの側近の武士たちの行動を見逃してはをるまい！)

もしも、災ひが、主家に及んで、主人の身に測り知れないことが起れば、頼基は家臣として殉ずる覺悟……わが一身の安穩のみを希つて、義に叛いて卑怯に振舞ふことは、法華經を奉ずる者としても赦されはしない。

「南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！」
笹原を過ぎて富士見平へかかると、昨日降つた雪がそのまゝ残つてゐて、頼

基は心の急りから足を止らせさうになる。
(去年の秋から、江間郷で過す日が多く、鎌倉にをらなかつたばかりに……)

師と共に死ぬ覺悟、龍の口の刑場へ馬の轡を取つて行つた頼基は、そこで起つた奇瑞も目撃し、日蓮聖人が依智の本間家へ入られた後、雪の佐渡へ流罪となつて行かれてからは、虚脱した者のやうになり、鎌倉の長谷にある邸は、兄弟

たちに任せて、老いたる主人のある伊豆國の江間郷にばかりゐたのだつた。
濃い淺葱色に暮れて行つた空に、星の光が見えてきた頃、頼基は蘆の海の邊

へかかつてゐて、間もなく、樹蔭で松明へ火を點した。
「南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！」

松明の火を靡かせて駈けて行く頼基の姿は、忽に雪の深い葦河宿を過ぎ、宿の外れにある關も過ぎ華麗な社殿は闇に没してゐて參道の燈籠の灯だけが瞬

いてゐる箱根權現の社頭も過ぎて行つた。

(この頼基が駈付けるまで、なにことも起らず、野望など微塵も抱いてゐられない若殿が、どうか、無事でゐられますように！)

忠義一圖の頼基が胸の内を捧げてゐる祈りは、題目の聲を高くして行く。
「南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！」

頼基がかざしてゐる松明の火は、二子山の西を廻つて蘆の湯を過ぎ、それから湯坂峠と呼ばれてゐる鷹巢山の屋根を下る小徑になり、その徑は勾配が急な

ので、早川と須雲川の合流してゐる邊にある湯本へ雪煙を揚げて下つて行く速度は凄じかつた。

「止め！ 止め！ なに者ぞ！ 名乗れ！」
篝火が焚かれてゐて、武装した兵たちが固めてゐる大佛切通へ、四條頼基が

かかつたのは、その夜の亥刻(午後十時)に近い頃であつた。
伊豆國の江間郷から相模國の鎌倉へ、近道にしても二十里の餘はあるであら

う。
しかも峻しい箱根山へかかつてからは、松明をかざして行く夜の道だつたのに、主家を氣遣ふ一心で、僅に三刻(六時間)ほどで辿ついたのであつた。

松明は燃えつくしたので、大磯の邊で捨てしまひ、灯明りなしに道を急いできた頼基の直垂姿が、突然、篝火に照出されたので、大佛切通を固めてゐた

兵たちは怪み騒ぎ、薙刀や槍を構へて誰何したのであつたが、その時、彼は息を切らせてをり、烈しい渴を覚えてゐたので、直には咽喉から聲が出なかつた。

「怪しい奴！ 引ッ捉へよ！」
侍烏帽子を冠つて鎧直垂を着け、床几に腰を下して、兵たちを指揮してゐた

武士は、直に名乗らない頼基の直垂姿に、主家の安否を氣遣つてゐる烈しい焦

慮があるのを、殺氣と見て取つたらしく、握つてゐる鐵扇で、頼基を差して叫ぶと、袖無しの胴衣の上に腹巻を着け、上帯に打刀を差して、武士の周圍に控へてゐた兵たちが口々に叫びながら躍出して行つた。

「こらッ！ おのれは啞か！」

「なに用あつて、夜陰、この切通を！」

「汝ッ！ 痛い目を見たいか！」

(四)

頼基が鞆のやうな烈しきの息遣ひを鎮め、咽喉を濕さうと思つて唾液を呑んだ時、兵たちが躍りかかつてきたので、彼は名乗らうとしながらも振拂はないではゐられなかつた。

「わ、われは！」

頼基が腰の太刀へ手をかけるのを封じようとして、右から躍りかかつてきた兵を、彼が飛鳥の身軽さで交すと、その兵は空を泳いで、左から躍りかからうとしてゐた兵へ突當り、二人は、わッ!! と聲を擧げて、そこへ倒れた。

「われは、江間家の臣！」

拳を固めて、正面から、顔へ一撃をくれようとして突出してきた兵を、頼基は體を開いて拳を交し、刹那に、腕を掴んで足を拂ふと、その兵は、箆火の横へ鞠のやうに飛んだ。

その時、鐵扇を握つて床几へ腰を下してゐる武士の眼が險しく光つた。

「な、なにッ！ 江間家の臣！」

江間家といへば、名越の一族、その昔、越後守光時の謀叛があつたことは、武士の間で知れ渡つてゐる。



新



將

春の雪が降った昨日の午後から、幕府が厳しい警戒をはじめた謀叛の張本人
 京都の六波羅南の館にある北條式部大輔時輔と、鎌倉にゐて呼應してゐる評定
 衆中務大輔教時は、その光時の弟であり、名越左近大夫公時は、光時の甥であ
 る。

(さては、謀叛に加擔して、江間家の侍が、鎌倉へ！)

武士が濃い疑ひの眼を向けた時、頼基は世間に知れてゐる通稱を聲高々と名
 乗った。

『四條金吾頼基！』

『あッ！』

武士の咽喉から叫聲が出たばかりでなく、手強い相手と見て、得物を提げて
 包圍しようとしてゐた兵たちも、ビッ！と背後へ退いた。

四條金吾といふ通稱で知られてゐる中務三郎左衛門尉頼基が、醫術の達人
 であり、無類の劍の遣手でもあり、忠義一圖で手に負へない武士だといふ評判
 は、多くの者の耳へ入つてゐるのだ。

『四條金吾どのか！』

武士は鐵扇で膝を打つて、鎧直垂を着けてゐる身體を床几から乗りだした。

『いづれへ赴かれるぞ！』

『長谷にある、わが邸へ！』

『差支へない！ お通りあれ！』

『ごめん！』

頼基が一禮して、題目を唱へながら大佛切通を一散に駈けて行くのを見送つ
 て、武士は強く眉をひそめた。

耳馴れない題目が妖しい呪文のやうに聞えて、またしても、濃い疑惑が胸へ

浮んできたのであつた。

「やッ！ 頼基さまちや！」

「早うく、濯を！」

「いや、濯よりも、飲水をくれというておみでになる！」

「伊豆國から二十里の道を、一気に駆けて見えたげな！」

「そ、そりや、眞實か！」

「天狗ぢや！ 天狗ぢや！」

武藏大路を佐助ヶ谷の方へ入つたところが塔の辻で、そこにある江間家の邸の玄關に、灯明りや足音などが入亂れてゐる。

「頼基どのか！」

飯富長能が奥から走出てきた。

侍烏帽子を載せてゐる顔は、五十を一ツ二ツしか越へてゐない年頃に見えるのに、苦勞性なのか、烏帽子の下の髪毛が白い。

「いつ、江間郷を發たれたのか！」

「今日の申刻（午後四時）頃……」

若侍が持つてきた椀の水を、頼基は一息に呑んで振りかへり、江間家の危さを漉して障つてゐる長能の兩眼へ覗込んだ。

「なに、今日の申刻といへば……」

長能は訝りながら指を折つた。

「伊豆國から、三刻の間に、この鎌倉へ……おお！ 誰やら、天狗ぢやくといふてをつたが、そのことか」

「この頼基は、飛脚が勤まるであらう、は、は、は……」

頼基は氣遣つてきた塔の辻の邸に、まだ異變が起つてゐないのに安心したら

しく笑聲を立てた。

この頃、鎌倉から京都への飛脚は、一日に二十里、三十里と歩いた。

「さ、奥へ！」

長能の兩眼にも浮んでゐた微笑が消えた。

「結城、小宮、佐渡、上野、加治、陸奥の六人が詰めてをる！」

四條頼基と飯富長能は胸せし合つて、若侍がかざしてゐる紙燭に導かれて奥へ入つて行つた。

「おお！ 頼基か！ きたか！」

江間家の若い主人四郎親時は華やかな模様のある直垂で包んでゐる胸を熱くして、四條頼基が廣い肩幅を見せて兩手をついてゐるのへ見入つてゐる。

その横に、加治左衛門尉忠次がある。上野彌四郎がある。切り燈臺の灯明りを浴びて、小宮五郎左衛門尉、陸奥七郎、結城五郎、佐渡二郎左衛門尉も顔を見せてゐる。

寛元四年に、前將軍の藤原頼經が頼母しい武士と見て働きかけ、強引に陰謀へ引入れただけに、越後守光時は良い家臣を持つてゐた。

彼が雍髪して詫びて領地を沒收されると、家臣の多くが見限つて四散したが、それでも四條頼基をはじめ、忠節を守つて、主家に殉ずる覺悟を抱いてゐる家臣が十指に餘るほどゐるのだつた。

昨日からの鎌倉の險しい形勢を見て、萬一の場合は殉死する覺悟で駆付けてきた者が、若い主人の親時を八人も取巻いてゐる。

(五)

二月十日の夜は、なにこともなく更けて行き、翌十一日の黎明が近い頃に、

四郎親時が一眠りするといひだしたので、四條頼基をはじめ八人の家臣は、親時の居間に近く、彼方此方の部屋へ、分け／＼になつて引取つた。

春が近いといつても、大雪が降つて、鎌倉に雪景色を見せたほどなので、黎明近くは、眞冬を想はせる寒さであつた。

「うん、涙が出さうになつた。それほど嬉しかつた！」

飯富長能は寒さに顫えながら、夜のものから顔を出してゐる。

その横で、四條頼基も腰から外した太刀を抱いて、夜ものを被つてゐる。

「若殿も、随分と苦勞されたで、人物が出来た！」

「うむ……」

「教時さまから頻りに誘ひが來たらしいが、柳に風よ！ 叔父の面目も潰さぬ

よう、さればといつて、決して靡かぬ。しかも、家臣のわれらに氣遣はせぬよ

う、謀叛のことは胸へ收めて觸れようともされぬし、觸れさせぬのぢ

や。それゆゑに、若侍共は長閑なものよ！」

「……………」

頼基の夜の物へ横たへてゐる身體が、一瞬、熱くなつた。

（やッ！ 阿曾沼次郎が長閑げであつたのは、そのためか……）

彼は怒つて、阿曾沼次郎を拳で打ち庭土の上へ投飛ばしたことを後悔してゐる。

「ぢやが、江間家は危い！」

飯富長能の熱い息が、頼基の顔へかかつてきた。

「御内方者の眼が恐い！」

「うむ！」

「文永三年に、松殿僧正、法印嚴慧などが、宗尊親王を奉じて北條幕府を討滅



終

しようとした陰謀に、名越の教時さまが加擔してをられたことは、疑ひないのぢや！」

「……………」
「その教時さまの塔の辻の邸から、夜陰、しばく、それも裏門などから、この邸へ侍がきては、御内方者が見逃しはせぬ！」

「……………」
「この鎌倉に、今にも一大事が起る形勢ぢやが、その時は、一味と見られる怖れがある！」

「うむ！」

頼基は夜の物から顔を出してゐて、長能へ首肯が、灯のない暗闇で、兩眼を大きく睜いてをり、息を凝して鋭く耳を立ててゐる。

（江間家に疑惑がかかつてをれば、それを拂ひ拭ふために、それくくの筋を奔走して廻る考へであつたが、最早、その暇はあるまい！）

兵たちが大佛切通を固めて警戒してゐた物々しさから、彼は一大事が勃發する直前と感じたので、直垂を着けたまま夜の物へ横たへてゐる身體が、本能のやうに、鎌倉の市街で起るに相違ない異變を捉へようとしてゐるのだ。

しかし、伊豆國から二十里の餘もある道を三刻ほどで駈付けたために、頼基の鍛上げてゐる身體も、流石に綿のやうな疲労を見せてゐて、無意識に、深い睡眠へ陥ちようとする。

（あッ！ 眠つてはならぬ！ 最も警戒が必要なのは、烈しい抵抗ひを受けな
いで、相手を斬ることの出来る……寝込みを襲ふことの出来る、夜明け前では
ないか！ 眠つてはならぬ！）

彼は暗闇の中で、兩眼を睜り、耳を立て、一大事が勃發すれば、同じ塔の辻

にあつて、この邸から遠くない、中務大輔教時が薬師ヶ谷の邸から、時々、出向いてきて泊つてゐる別邸へ、先づ、幕府の兵が亂入するに相違ないと考へて、邸の外の微な氣配も逃すまいとしてゐる。

「あッ！」

頼基は叫んで、夜の物を跳ねた。

「頼基どの！ あの物音は！」

飯富長能も跳起きて、耳を澄してゐたらしく、暗闇から迫つた聲が聞えてきた。

時刻は、寅刻（午前四時）を過ぎてゐたであらうか。

「騒ぐな！ 騒ぐな！」

「聲を立ててはならぬぞ！」

「灯を消せ！ その灯を！」

忽ち、邸の内が騒然となつた。

昨夜は、侍たちが一人残らず眠らずにゐたらしい。

「長能どの！ 裏門の固めを頼む！」

頼基は太刀を抱へて部屋を飛出し、表門へ向つて廊下を駈けて行きながら低

聲で叫んだ。

「邸の外へ一足も出てはならぬぞ！ 身仕度して、思ひく場所へ潜んでを

れ！ もしも討手が亂入してきたら、邸へ火を放つて、殿のお供をするばかり
ぢや！」

（六）

その時刻に、刀鍛冶行光の鍛冶小屋のある臺地では、年老いて目聾くなつて

ある竹屋孫四郎が、はるかに響いてくる喚聲と物音に目を覺し、小袖に四幅袴を着けて住居を飛出してゐた。

「ヤッ！ 彼方にも、此方にも、火が見える！」

夜明け前の鎌倉の空は、黒い天鷲絨を張つたやう、星が一面に瞬いてゐるのが寶石を鏤ばめでもしたやうであつた。

「お父さん！ 火事ではありませんね」

いつの間にか、刀鍛冶の行光も起出してきて、小袖を着流した姿で、孫四郎の横に立つてゐる。

「行光さん、火事なら燃上つて焰が見えよう。可怪しい！ なんてあらう。松明の火かな。その、塔の辻の邊にも、えんくくと見えてをるが……」

孫四郎が枯葉を落して枝ばかりの立木の幹へ手をかけて、臺地から身體を乗りだすようにした時、塔の辻と想はれる邊に、わ——ッ！ と喚聲が揚つた。

「ほう！ なに事が起つてをるのぢやろ！」

孫四郎が佐々目ヶ谷の方へ向つて覗込む形になると、行光が咳いた。

「多勢の人が集つて擧げてをる聲のやうだけれど、夜明け前といふに……」

「お父さま！ お父さま！ なにか、そこから見えるのですか！」

夜又の聲が住居の戸口から飛んできた。

「彼方此方に火が見えてをるのよ！」

「火事ですか！」

「いいや、火事ではあるまい。松明の火のやうな気がするのぢやが……」

孫四郎はさういひながら、しきりに首を傾げてゐる。

昨日、鎌倉の雪景色を見に行つて、幕府や執權邸などのある若宮大路や小町の邊に、鎧武者が薙めいてゐたのが戦が始まる前のやうに感じられ、夜又は、そ

れを蒙古に備へて西國へ下つて行く武士たちといつたが、なにか、割切れないで變つたことが起りさうな気がしてゐることと、今、眼の下の塔の辻の邊や、東の方にえんくくと連つて火が見えてゐるのは、たしか、名越の邊と想はれるが、それとこれと……頭腦の中で繋ぎ合せようとしてゐる。

「おお、寒い！」

夜又が小袖の袂で胸を抱くようにして、星明りだけの臺地を駈けてきて、行光に寄添つて立つた。

「夜又、美鳥は眠つてをるのか」

「ええ……」

夜又が行光へ首肯いた時、塔の辻と想はれる邊に、なにか、烈しく物を壊してゐるやうな音が起つた。

「おや！ あの音は……家でも打壞してゐるやうな……」

「行光さん！ そのやうな物音だの。なんてあらう！」

「夜又、袴を持つてきてくれ！」

「えッ！」

「お父さん、一走り行つて見えます！」

「いいや、行光さん、行かぬがよいの！」

「なぜですか」

「なぜか判らんが、昨日から、この鎌倉に變事が惹起りさうな気がしてをつたのぢや。行つては危い！」

孫四郎が白髪首を烈しく振つて止めるのを、夜又は寒さに顫へながら見てゐて口を出さうとしなかつた。

承久の亂には朝廷方になつて戦ひ、商人の姿になつてからも、北條幕府討滅



の悲願を抱いて、耽々と機会を狙つてゐた父に、常人には窺へない鋭さがあることが、今、彼女に首肯されたからであつた。

「ヤッ！ あの方角は、名越！」

空も山々も市街も一色の暗黒に包まれてゐる鎌倉の東の方角へ向つて、行光が伸上つた。

わ——ッ！ 巨浪が押寄せてでもくるかのやう、遠く名越の邊に揚つた閃撃が響になつて、この臺地へ傳つてきたのだつた。

「おお！ やはり、ただごとではない！」

孫四郎も立木の幹へ手をかけて伸上つた。

「お父さま！ 蒙古が攻めてきたではありませんか！」

夜叉が符えて聲を戦かせてゐる。

「は、は、は……」

孫四郎は白い眉毛の根をひそめたまゝで笑つた。

「夜叉、蒙古國は、はるか、海の向うにある。日本を威嚇してをつても、攻めてくるのには、夥しい軍船がいるから容易には姿を見せまい。ちやが、なあ、行光さん、あの方角は、たしか、名越ちやが、なにか惹起つてをるのであらうか！」

(七)

竹屋倉孫四郎と刀鍛冶行光夫婦が眞暗な臺地に立つて、それ／＼の想ひで見入つてゐる……その名越は、今、修羅の巷にならうとしてゐる。

承久の亂に、十萬騎を率ゐて東海道を攻上つた叔父の北條時房、兄の北條泰時と呼應して、四萬騎を率ゐて北陸道を攻上つた北條遠江守朝時が、ここに

邸を構へてから、世の人々が名越どのと呼んできた由緒のある名越の邸……その朝時の長男で家を嗣いだ越後守光時は、流されたまゝ、伊豆國の江間郷に引込んでゐて、その弟である評定衆尾張入道時章と、その長男の左近大夫公時とが棲んでゐる名越の邸を、執權北條相模守時宗の指揮する討手の武者たちが松明をかざし、太刀を手に、薙刀、薙鎌、槍などを煌かせてゐる兵を従へて薙斬と包圍してゐる。

鎌倉の西の佐助ヶ谷や佐々目ヶ谷、塔の辻、刀鍛冶行光の鍛冶小屋のある臺地などへ、響になつて傳つた鬨聲は、名越の邸を包圍した武者たちが亂入の合圖に擧げたものであつた。

『それッ！ 踏込めく！』

星兜を冠り黒糸絨の大鎧を着て黒漆の大太刀を腰に横たへてゐる武者は、討手の大將大藏頼季、押開かれた名越家の表門の前に、松明をかざしてゐる武者たちに圍まれて立つてゐて、采配を烈しく振つてゐる。

『名越どのとて、用捨は無用ぞ！ 逆心を抱く痴者を斬り、功名手柄を樹てのちや！ 怯まずに踏込め！』

名越の邸を包圍した討手は、勇猛の武士として名を知られてゐる大倉二郎左衛門、澁谷新左衛門、四方田瀧口左衛門、石川神二左衛門、薩摩九郎右衛門三郎の五人に率ゐられてゐた。

しかし、先刻、大將大藏頼季は先頭に立つて、曉闇に包まれてゐる名越坂を登つてきながら、星兜の眉庇の内で、幾度となく、眉をひそめてゐた。

包圍する前に、名越家の者に氣取られないやう、高い聲を立てることは禁じてあるのだが、それにしても、大地を草鞋が踏んでゐる足音と、胴丸や腹巻の草摺が觸合ふ音と、薙刀、薙鎌、槍などの柄が大地を突いてゐる音のほか、後

は森々と鎮りかへつてゐて、囁く聲はもとより咳く者もなく、宛然、墓場へ向つて行く葬列のやうな陰気さが感じられてくるのだ。

(はて、なんとしたことか……)

大藏頼季は討手の大將として、心もとなない氣がしてきた。

たとへ、高聲は禁じられてゐても、形に現れない勢……討手の一人／＼が烈しい意氣込を持つてゐれば、それが一ツになつて、ひた／＼と機勢むものが感じられるはずなのに、ないばかりでなく、陰気に滅入つてゐる。

名越家といへば、兎角の噂はあつても、北條一門の名家、弓を射ても、太刀を執つても、馬に乗つても、人に名を知られてゐる武士も多勢あることであり、寢込みを襲つて亂入しても、烈しい抵抗ひは受けるに相違ないのだ。

(討手に向つた者が、散々な姿で逃げるようなことがあつては……)



頼季は兜の緒で強く括つてゐる顔を澁くして唇を噛んだ。

(けれど、では、なにゆゑに……)

頼季は率ゐてゐる討手の意気が沈んでゐる……その理由を探しながら、大鎧の弦走の下にある自分の胸の内にも、その理由がひつそりと潜んでゐるのに気が付いた。

(血で血を洗ふ！)

この世で、最も血の濃い同族が、敵になり味方になつて、相手を殺さうとしてゐる……討手に向う者の内に、その醜さを意識してゐる者は幾人もゐないとして、無意識ながら全體が包まれてゐる……彼はさう感じ取つたので、名越家を包圍すると、表門も裏門も閉ぢられたまゝにして置き、密に築地塀を乗越へさせるつもりだつたのに、討手の意気を熾んにするために鬨聲を揚げさせ、大倉二郎左衛門をはじめ、五人の武者に率ゐられて、討手の者が門を押開け、どツ！ と名越家へ亂入するのを見ながら烈しく采配を振つてゐるのだつた。

「亂心を抱いて、執權相模守時宗さまを亡き者にしようとしてゐるは、左近大夫公時ぞ！ よいか！」

頼季の叫ぶ聲が、邸の背後にあつて、まだ暁闇に包まれてゐる名越山へ羽してゐる。

「逆臣公時を斬つて、首級を挙げたなら、鬨聲を擧げて合圍せよ！ もしも、抵抗する者があらば、女子供とて用捨すな！」

(八)

『父上ッ！ 父上ッ！』

公時が死物狂ひで叫んでゐる聲が近付いてくる。

父の尾張入道時章は白小袖を着流して、兵具鉾の太刀を手にして袴の上に立つてゐる。

(なにごとぞ！)

わーッ!! と揚つた鬨聲に夢を破られ、目は覺しても、しばらくの間彼は袴に身體を横たへたまゝであつたが、邸の内に物の倒れる音、壊れる音、叫聲が起つたので、俄破ッ! と跳起きて、枕頭から兵具鉾の太刀を取つたが、切り燈臺の灯が消えて居間の内が眞暗だつたので、なにごとが起つたか……判断しようとしてゐると、悲鳴が起り、怒號が起り、太刀打の響が聞え、それを縫つて、公時の叫聲が聞えはじめたのであつた。

(なにごとぞ！)

入道時章は五十八歳の春を迎へたばかり、北條朝時の子に生れながら、兄光時のやうな烈しさがなく、弟教時のやうな野望もなく、温厚篤實な人柄であつた。

亡き最明寺入道時頼も、それを認めて深く信頼してをり、兄光時の陰謀が發覺した時も、なんの疑ひをかけられなかつたばかりか、光時が殺されずに濟んだのは、時章の人柄のためと噂されたほどであつた。

彼も、また、時頼の識見や人格に深く心寄せてゐたので、時頼が逝くと、即座に髮毛を斷つて入道したのであつた。

その時章が、この頃、烈しく胸を痛めてをり、絶えず念頭を離れないのであるのは、蒙古國との關係が、年々、逼迫してくることで、亡き時頼の恩に酬めるためにも、若い執權時宗が處置を過らないよう、評定衆としても、北條一門の者としても、必死に補佐して行く覺悟であつた。

蒙古國のこの他、心に氣遣ふことがないので、突然、鬨聲が聞えてきても

邸の内に騒ぎが起つても、それが、なにごとであるか……判断がつかない。

時章は濃厚で篤實で、老齢でもあるので、思慮が深い。

怒號や悲鳴や太刀打の響まで耳へ入つてきた上に、わが子公時が死物狂ひの聲で呼んでゐるのが耳に入つては、いよく輕率に行動は出来ない。

「誰かをらぬか！ 灯を持って！ 灯を！」

公時の身に危急が迫つてゐては、なほさらに、物具で身を固めなければならぬ。

「父上ッ！ 父上ッ！」

公時の叫聲が急速に近付き、それを追つて、幾人もの聲が近付いてくる。

「逃げるか！」

「卑怯ぞ！」

「ええッ！ 邪魔するかッ！」

怒聲が轟き、悲鳴が揚り、ビッ！ と音がしたのは、誰か斬られたのであらうか。

「父上ッ！ 父上ッ！」

公時の叫ぶ聲から、彼が手負になつてゐることを知ると、時章は兵具鉢の太刀を引抜いて叫んだ。

「公時！ 父は、ここぞ！」

最早、物具で身を固める暇はないと判断して、時章が手探りで居間の板戸を引開けて廊下へ出ると、途端に、明りが差してきた。

「待てッ！ 公時！」

「どこまでも、名越の家に泥を塗るかッ！」

「謀叛は發覺してをるぞ！」

時章が謀叛と聞いて愕然となつた時、右手へ折れてゐる廊下から、赤地の錦の直垂を着けた公時が、髪を振亂して喘ぎ、兜を冠つて胴丸を着けてゐる逞しい武士と太刀を合せたまゝ現れた。

（謀叛！ 公時が……謀叛……）

時章にとつて、それは寢耳に水よりも烈しい愕きであつた。

しかし、血を分けて、三十八歳の今日まで愛情を注いできた親に、わが子の危急は、なにものよりも重大であつた。

「待てッ！ その公時は！」

時章が救ひの手を差伸べようとして、引抜いた太刀を掲げ、殺氣立つて廊下を駈出した刹那であつた。

その暗い部屋から、梨打鳥帽子に鉢巻、萌黄緋の腹巻を着けた武者が躍出て、時章を追つて、背後から、肩先へ太刀を浴せた。

「うッ！」

時章が太刀を手にしたまゝ仰反ると、その聲を、手負ながらも、父の聲と聞いて、

「父上ッ！」

公時が叫んで振りかへらうとした瞬間に、怒號が轟いた。

「地獄へ失せろッ！」

「あッ！」

新手の武者が現れて、公時の脇腹を太刀の切先で突刺したのだつた。

「わ——ッ！」

謀叛を企てた左近大夫公時の首級を擧げた合圖の鬨聲が、名越の邸に起つた頃、東の空が仄白くなつてゐた。

（以下次號）

今月の行事から



立宗七百八年、会長戸田先生亡き後、再び迎える新春である。広宣流布をめざし、「前進」を合い言葉に、百三十万世帯の学会員が、希望に燃えて、新しい一年の第一歩を踏み出す時である。

- ① 百五十万世帯の達成
 - ② 信心指導の徹底
 - ③ 僧俗一致の増進
- ◇ 三大方針を高くかかげて――

学会員の一年は、各地の正宗寺院で行われる初動行に始まる。今年一年のしあわせを祈るとともに、広布への戦いを誓ったのである。

そして、本部では、小泉理事長、池田

総務を中心に、各総支部本部では、東京より派遣された大幹部を中心として、各地の幹部が、まず、今年一年やらんかなの決意を、大御本尊様にお誓いしたのである。

◇ 一九六〇年は、戦後十五年間のうちで世界の人々が、もっとも希望をもって迎えた年であるという。

核実験の停止、軍縮の実施等を始めとして、来る五月、パリで行われる東西首脳会議が、東西の緊張の緩和に、拍車をかけるのではないかと期待からである。はたして、期待どおりになるかどうかは今後の課題である。

◇ しかし、国内外の動静はどうであろうとも、われわれ創価学会員こそは、一九六〇年、立宗七百八年の前進の年を、文字どおり、希望にみちた年にしたいものである。

◇ 二日から登山会が始まった。今年からいままでの初登山会がなくなり、一月も月例登山会が、四週間にわたってもたれた。これも、学会の大発展をしめす一つの姿であろう。

◇ 登山会は、二日の初御開扉に始まり、大御本尊様にお目通りして、もったいなくも御法主陛下に、過去遠慮からの罪障消滅、そして、一家のしあわせを御祈念していただいた喜びに、身も心も晴

やかになる。

◇ 広宣流布は仏勅である。しかし、かならず、日達上人の時代にこれを達成せんと、固くお誓いしないではいられない。

◇ 白雪をいただいた、新春の富士の姿にも、新しい決意を固めるにふさわしい、荘厳なお山のたたずまいだった。

◇ 一方、世間では、除夜の鐘の音とともに、初詣での人波が、明治神宮や、伊勢神宮へと、流れていった。そして、新しい年の夜明けとともに、その数をまわしていったのである。

◇ 一年のしあわせを心に願ってか、明治神宮へは、三日間に百二十万、伊勢神宮には六十万人の人たちが、初参りに行くなど、どの神社も人出の新記録で、ホクホク顔だという。

◇ 昨年来問題になっている、神道復活の動きも、一つには、初詣りにやって来る何百万という、宗教に無智な民衆を、頼りにしたのも思われる。

◇ 今年も神道復活の問題、あるいは宗教法人法の問題、その他邪宗のあがきは、ますます盛んになってゆこう。

◇ 邪宗邪義を粉砕し、しあわせをもとめて、迷っている大衆の幸福を願って、広布への大道を、堂堂とかつ歩してゆこうではないか――

◇ 前進の年にふさわしく。

編集後記



◇ 石田理事の論文は、種々ご多忙の中で、ごく短期間のあいだに執筆していただいたものである。この問題については、いつか機会をみて、本格的なものを執筆して下さるということである。

◇ 「邪宗退治物語」を、今月から、連載してゆくことにした。日蓮大聖人ご在世から、現在にいたるまで、教学を中心に、読みやすくつづつてゆくつもりです。どうか、ご期待ください。

◇ 本年は、信心指導の徹底を中心に、内部充実をはかるとともに、その力を持って、大きく前進する年である。

◇ この意義ある年にあたって、広布への一翼をになう本誌も、さらに充実をはかるため、二名の編集部員を増加し、新たに編集委員を構成して、本誌の企画の立案、原稿の執筆、教学的諸研究等にたずさわっていただくことにした。そのメンバーは左記の十二名である。

大川清幸 竹入 義勝 三宅健夫
青木 亨 佐藤 武彦 諸富文紀
岡安博司 森田 康夫 飛田敏彦
白井俊子 吉沢紀美江 菅原馨子
編集委員諸氏の「大奮闘と、読者のみなさんの絶大なるご支援を、こんごともお願い申し上げます。

大白蓮華 第百五号 (二月号)

昭和三十年一月十六日 第三種郵便物認可
昭和三十一年二月一日発行 毎月一日発行

編集者 小平方平

印刷所 東京都渋谷区用毎町九 明和印刷 KK
印刷人 東京都渋谷区用毎町九 松村保

発行所 東京都新宿区信濃町三ノ六
宗教法人 創価学会

頒価五十円

